

調査報告 一二二―五

紅梅文庫旧蔵本源氏物語「若紫」卷解説・影印

―付、新出定家四半本「若紫」と三条西家本との位相に関する考察

上野 英子

はじめに

紅梅文庫旧蔵本源氏物語（以下、紅梅文庫本と略）をめぐって、稿者はこれまで以下のような解題と影印とを紹介してきた。

①「調査報告一二二 紅梅文庫旧蔵本源氏物語について―いま、なぜ、紅梅文庫旧蔵本なのか（付、桐壺・帚木影印）」（平成三十年三月「年報」三八号所収）

②「調査報告一二二―二 いま、なぜ、三条西家本なのか―付、紅梅文庫旧蔵本源氏物語」空蟬「影印」（令和二年三月「年報」三九号所収）

①では紅梅文庫本の書誌と、同本の祖本が三条西実隆が最も早期に書写し、その後も長く手沢本としていた源氏物語写本（散逸。いまその成立年代から〈文明本〉と仮称している）であったことを報告し、紅梅文庫本のもつ意義を説明し

た。②では三条西家の本文の基本資料ともいべき日本大学蔵三条西家証本と紅梅文庫本さらにその周辺資料となる写本群について、混成本文の時代と言われた室町時代に書写されたこれらの写本群が、源氏物語本文史上において如何なる意味を有するのか、換言するならば、これらの本文を調査することで何が期待できるのかという見通しを述べ、以上については拙著(1)でも論じてきた。よって本稿以降は、紅梅文庫本の主立った卷々を採り上げてその特色を分析し、影印ともども紹介していくことにしたい。今回は若紫巻を採り上げる。

なお紅梅文庫本をめぐっては、淑徳大学教授の齊藤鉄也氏に協力を仰ぎ、統計学の立場から分析していただいた。次の③④⑤⑥がそうで、③④では紅梅文庫本の前半部(桐壺から篝火まで)の、⑤⑥では後半部(野分から夢浮橋まで)の結果報告となっている。

③「調査報告 二二―三 仮名字母の出現傾向から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付け(1)」(令和二年三月「年報」三九号所収)

④「調査報告 二二―四 N gramを用いた表記から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置づけ(1)」(令和二年三月「年報」三九号所収)

⑤「調査報告 二二―六 仮名字母の出現傾向から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付け(2)」(令和三年三月「年報」四〇号所収)

⑥「調査報告 二二―七 N gramを用いた表記から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付け(2)」(令和二年三月「年報」四〇号所収)

詳しくは氏の報告書を参照されたいが、稿者なりに、専門外なればこそその大胆なまとめ方をさせていただくと、扱った諸本をすべて巻単位に並べての調査である。そして③⑤は、仮名字母等の出現傾向からみて紅梅文庫本の各巻は同

一書写者によってなされたものかどうか。また同本も含めて、室町時代の諸写本の間でよく似た仮名字母の使い方をしている巻はあるのかどうかという問題を扱っていただいた。よく似た使い方をしている巻があれば、それらは同一書写者によって写された可能性、あるいは臨模本という可能性が濃厚ということになる。

④⑥は、Ngramを用いた表記法の分析で、本文異同が少ない巻同士はNgramで計測された写本間の距離も近いことになる。そこで紅梅文庫本の各巻によく似た本文を有するのはどの写本の巻か、また紅梅文庫本に限らず主立った写本同士の間で、本文の似た巻をもつ写本はあるのか、という解析をお願いした。ただし齊藤氏のNgramでは本行のみを扱い、かつ表記法の異同も加えている。例えば前者、本文訂正や異文注記・傍注等書き入れの多い写本、また表記の異同が顕著な写本については、統計結果の解析にかなりの注意が必要なようである。ことに多くの書入れ修正によって定家自筆本に近づいたとされる大島本の場合、Ngramによる統計結果は周知の事実とされてきた同本の位相とは、若干異なる結果がでてきたようである。だがこのことは、訂正加筆以前の大島本の解明、加藤洋介氏の説をかりれば②、大島本が最初に底本としたであろう室町期の写本とは一体どんな写本だったのかという問題に、解決の糸口を与えてくれるものと思われる。

こうした経緯に加えて、本稿ではもう一つの報告事項が生じた。本学は平成三十年度より「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」という課題で文部科学省私立大学ブランディング事業に選定され、その柱の一つとして三D高精細マイクロスコープを用いた和紙の研究チームが発足しているのだが、今回、メンバーの一人である澤山茂氏（もと本学食生活科学科教授、現在は文芸資料研究所客員研究員）に協力をお願いして紅梅文庫本の用紙を分析してみたところ、稿者が①で報告した内容に加えて新しい結果が出たからである。

よって本稿では紅梅文庫本の若紫巻について、（一）用紙 （二）本文の位相 （三）本文訂正と書き入れの順に報告し、

最後に若紫卷の影印を掲げることにする。

(一) 用紙

【若紫卷基本書誌】

表紙寸法縦一八・〇糎×横一八・〇糎。紺無地紙表紙。中央に朱色無地紙題簽(題簽寸法縦一〇・二糎×横二・五糎)貼付。題字「わか紫」(墨書)。列帖装(四孔・後補青色糸)。遊紙は前後ともに各一丁(後見返しに貼付された丁が剥がれて遊紙のようになっていいる)。

墨付き本文六四丁。奥書・識語無し。片面一〇行×一行一六字内外。和歌は改行二字下げ二行分かち書き、後続の地の文が和歌の末尾にそのまま続く形式。奥書・識語無し。奥入無し。付箋無し。若干の本文訂正・異文注記・鈎点・朱点等がある。該書の書誌は紅梅文庫本の他の帖と比較して、特に違和感はない。

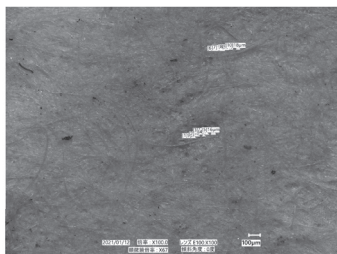
【用紙について】

紅梅文庫本の用紙は、薄いが紙面は比較的滑らかで、肉眼による墨の滲みは殆ど見られず、**はりもある**。こうした観点から稿者はこれまで楮斐漉き混ぜかと推測してきた。しかし今回3Dデジタルマイクロスコップで確認したところ、楮主体であり、しかも打紙処理を施さない用紙であることが判明した。次に澤山茂氏に撮影していただいた画像【A・B・C】を掲示する。なお口絵にはカラー判を掲載しておいた。

紅梅文庫本2丁ウ⑤行目傍書「かき」朱点部分拡大図：
(キーエンスVHX-7000) 澤山茂氏撮影

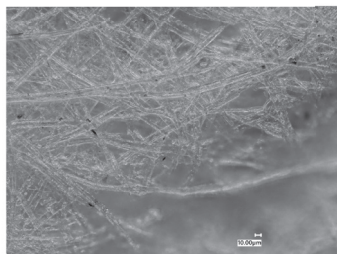
【A】×100倍

・リング片射上・2D画像



【B】×500倍

・リング片射上・2D画像

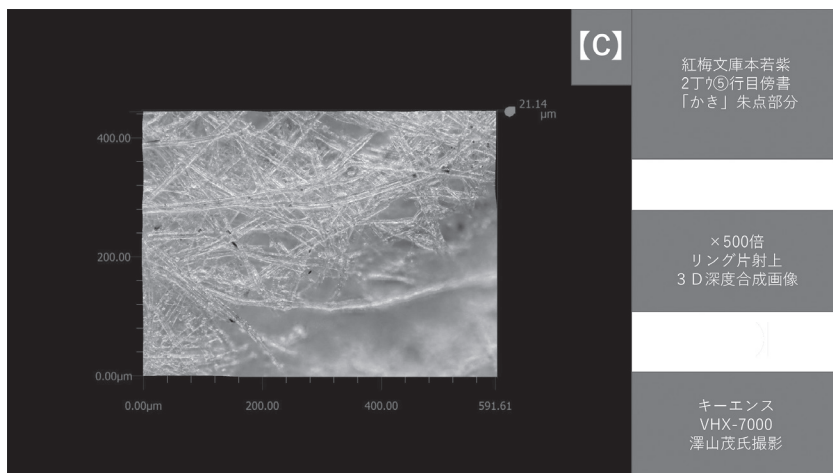


【C】

紅梅文庫本若紫
2丁ウ⑤行目傍書
「かき」朱点部分

×500倍
リング片射上
3D深度合成画像

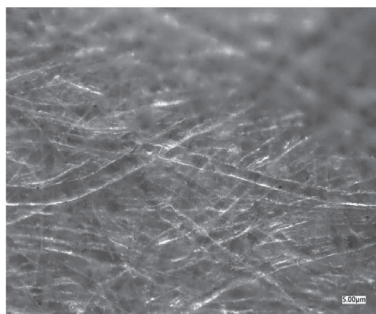
キーエンス
VHX-7000
澤山茂氏撮影



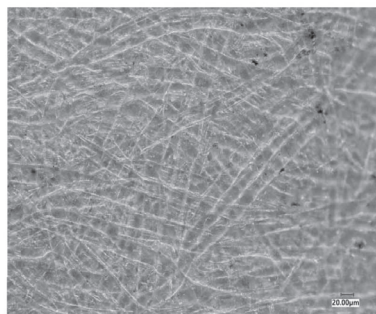
この三葉の写真は、紅梅文庫若紫卷二丁目裏⑤行目にある墨筆の補入傍書「かき」の「か」に付された朱点部分を、倍率を変えて撮影、あるいは深度合成したものである。全体的に赤みがかった色合いなのは、朱点部分だからである。撮影機材はキーエンスVHX—七〇〇〇を用いた。

上段の写真【A】【B】は共にリングの片面から光を当てて撮影したもので、2D画像。但し【A】が倍率を一〇〇にしたのに対して【B】は五〇〇倍である。一〇〇倍程度の画像【A】ではあまりよく判らないが（実際、稿者が持っている二五〇倍まで拡大可能なハンディ顕微鏡でも、よく判らなかつた）、五〇〇倍の画像【B】になると、繊維と繊維が立体的に交差していきい平面になっていないこと、換言すれば繊維と繊維の隙間が空いていて、あまり目が詰まっていなことが確認できる。

また【C】は同一箇所を五〇〇倍のまま深度合成した3D画像である。縦軸と横軸が距離、斜めが深度で、 $21.14\mu\text{m}$ がこの画像の最深部になる。この繊維は楮のようで、しかもこの場合、丸みを帯びている。打っていたならば、もう少し平たく、きしめん状になるはずであるから、やはり打っていないのだろう。そしてどの繊維も、太さにさほどのばらつきは無いが、まれに繊維幅が $10\mu\text{m}$ 以下のものもある。ということは、雁皮などの異なる繊維が微量に混じっているようである。なお所々に見える白い小さな塊は、植物が放出したシュウ酸カルシウムの結晶。黒点は黒皮（ハゴ）等の残存と思われる。



若君片右からx500左側薄い部分2D



おほししらるうへのx500_2D_1倍紙

比較のため、同じく澤山氏にお借りした別の画像を掲げてみよう。本学所蔵伝藤原為家筆河内本源氏物語薄雲巻切「若君はらまれ」（表）「おほししらるゝ」（裏）の五〇〇倍画像で、楮を用い、なおかつ打紙処理を施したものである。なるほど同じ五〇〇倍画像でも、こちらは平面化が進み、繊維と繊維の間が詰まっているのがよくわかる。

この伝為家筆河内本切は、もとは鎌倉期の写本だったようで、紙面を観察した澤山氏によれば極上の打紙だという。源氏物語のような大部な作品の写本を作成する際に、物語には珍しい大四半という大きさの、しかも極上の打紙まで施した紙を用いているのだから、かかる用紙を大量に供給できた人物はよほどの権勢家だったことになるのだろう。

一方、室町期の写本である紅梅文庫本は、打紙処理の施されない「素紙」である。そこから連想されるのは、制作者もしくは注文者側の資力の相違だが、それだけだろうか。

打紙に関する記述は「正倉院文書」『延喜式』に多く言及されており、殊に写経の盛んだった奈良時代や平安初期によく用いられた技法だったようである（3）。だが根気強く叩いていかなければならないので、相当の手間暇がかかる。溜め漉きで作った紙は表面に凹凸が出やすく、打紙処理を施す必要性があったのかもしれないが、流し漉きの時代に入ると、打紙処理は漸次必要不可欠な処理で

は無くなつて、高級品にのみ施されていたということはないのだろうか。

例えば『実隆公記』に「鳥子百八十枚遣経師、令打之。」（大永三年閏三月五日）とある。当時、紙は贈答用にも多く用いられ、名筆家で書写依頼の多かった実隆の日記には様々な紙の名前が記されているのだが、「打紙」に関する記述は驚くほど少なく、右はそのうちの一例である。「鳥子」（鳥の子）百八十枚を経師に送って、打紙処理をさせたと読める。当時最も高級品だったという鳥の子でさえ⁽⁴⁾、打紙処理を施さない状態で流通されていたことが窺われよう。この時、実隆は経師に打たせたが、人々はよほどのことが無い限り、わざわざ打紙処理に出してまで用いることは少なく、室町時代における物語の写本づくりでは豪華本を除き、むしろ非叩解紙を用いることの方が、一般的になっていた、ということはないのだろうか。

そういえば、高田信敬氏によれば、伝一条教房筆一条兼良細筆書き入れの「大四半源氏物語切」もまた「楮素紙」で打加工は施されていないという⁽⁵⁾。本学所蔵の『明融等筆本源氏物語』も同じく室町期の写本だが、全四冊中、実に三二帖の用紙が非叩解紙である。更に同じく『耕雲本源氏物語』や、源氏物語で初めて活字化されたとされている『慶長古活字版源氏物語』も然り。初期の古活字版は贈答用に作成されることが多かったようだが、それでもこの場合、打紙は用いられていない。『絵入本源氏物語』や『湖月抄』といった江戸期の版本も同様である。草双紙類になると『修紫田舎源氏』のように、打つ代わりに填料を加えたものもある。印刷技術の発達に伴い大量の紙を消費するようになった江戸時代では、紙面の平坦化・潤滑化を図るために、填料を利用しているようである。

楮主体の素紙であることが判明した紅梅文庫本だが、それは時代によって熟紙加工法が変遷していった反映なのか、あるいは時代には関係なく、証本用・複本用・献呈用・手沢本用等、写本の用途や目的によって紙の使い分けがなされておられ、大部な源氏物語などは手沢本程度のものには素紙が用いられていたからなのか、今回新しい事実を見つけ

ることが出来たが、判明した事実をどのように解釈し位置づけていくかは、これからの課題のようである。大方のご教示を仰ぎたい。

【本行書写者】

打紙でないにも係わらず、紅梅文庫本には墨のにじみが殆ど無い。このことは、例えば山岸文庫の明融本が（同本は巻によって本文料紙にばらつきがあるが、そのなかの非叩解紙である藤裏葉巻の場合など）墨の滲みが顕著であった点と比較すると、実に対照的である。墨の成分・濃度が違っているのかもしれないが、書影からみた印象では、明融本との相違は紅梅文庫本が女手で細い穂先の筆を使用した、あるいは穂先に含ませた墨の分量を上手に加減していたためかと思われた。全体的に、実に丁寧な書写である。

その書写者だが、前掲齊藤③⑤によれば、紅梅文庫本の各巻は、後補本である総角巻、判定のための必要文字数に達していない花散里・関屋・篝火、更に横笛巻を除いて、実隆筆本に近い仮名字母の使い方をしている巻は無く、かつ「同筆の可能性のある写本間距離1・64以下に存在し、同筆である可能性を指摘できる」とのことである。ということは、実隆自筆本を転写したと本奥書に明記されてある紅梅文庫本だが、表記法まで忠実に臨模していたわけでは無く、かつ全冊ほぼ同一人物によって書写された可能性が強いようである。但し横笛巻だけは、紅梅文庫本の諸帖よりむしろ柿原家本・桐壺・蓬左文庫本・空蟬（共に伝実隆筆）の方に近似しているという。その横笛巻だが、筆跡・用紙・装幀どれをとっても他の諸帖と何ら変わりはないので、紅梅文庫本（あるいはその底本であるところの伏見宮家本）の書写方針が横笛のみ違っていたのかもしれない。ともあれ、若紫巻については他の冊と同一筆者とみて大丈夫なようである（6）。

紅梅文庫本の祖本にあたる〈文明本〉は、実隆が初めて作成した自身のための源氏物語テキストで、全巻自ら書写した写本である。『実隆公記』によれば文明十七年（一四八五）閏三月二十一日に完成し、永正三年（一五〇六）八月二十二日に売却されたわけだが、実隆はその間、何度か転写を許している。伏見宮家もそのなかの一人であった。紅梅文庫本夢浮橋の本奥書によれば、

本云

此物語五十四帖以侍従大納言実卿自筆本／上臈局（法雲院左大臣女）手自被書写者也／深秘不可遣他所而已／

明応四年六月一日 李部王（判）

とある。「侍従大納言実卿自筆本」すなわち実隆が全冊自身で書写したところの〈文明本〉は、伏見宮家の「上臈局」（左大臣今出川教季女）によって転写され、明応四年（一四九五）六月に「李部王」（式部卿宮、伏見宮邦高親王）の奥書を得たと解釈できる。明応四年当時、今出川教季女は既に嫡子貞敦親王（当時八歳）の生母であった。実隆の源氏本を借用したこと、実隆に五十四帖銘（題簽）の揮毫を依頼したこと（⁷）、邦高親王自身が奥書を揮毫していること等から、上臈局の源氏写本作りには伏見宮家も全面的な協力を惜しまなかったことが窺われる。こうして上臈局本は「深秘不可遣他所而已」という親王の言に従い、同家に秘蔵されていたのだらう。

時が巡って、永正十七年（一五二〇）三月七日、やむなく二度目の手沢本（永正本）を売却せざるを得なかった実隆は、売却金の一部で用紙を購入し、新しいテキストの作成に取りかかった。これが三度目のテキストとなった（大永本）である。十日後には伏見宮家の源氏物語（「南御方本」）を借用、書写した。かかる借用はその後も何度か続き、公条や公順も書写を手伝っていたようである（⁸）。なお伏見宮家における召名の変遷について詳細な調査をなさった中城と子氏の御教示によれば、このとき今出川教季女は「南御方」と呼ばれており、よって「南御方本」とは先の「上臈局本」の

ことだという。具体的な論証はいずれ活字になるであろう氏の論文に期待することにした(9)。

そしてその三年後の大永三年(一五三三)、伏見宮家(当主は貞敦親王)からの要請に応えてであろう。引退した実隆に代わって公条が、宮邸に赴き源氏物語の講釈を行った。この講釈は三年の歳月をかけて読了したようだが(10)、その間、宮家では貞敦親王のみならず、生母教季女や室三条香子をはじめとする女性たちも聴聞していたと思われる。

そして時系列は不明だが、ある時これを転写できた人物がいた。ほぼ全冊を一人で(筆跡から見て女性)丁寧に書き、底本の奥書はそのまま転写したものの、新たな奥書・識語の類は一切付けなかった。全冊同質の非叩解紙に、表紙・見返し等の装幀も地味で、紺無地表紙に朱色題簽を押した点などは趣向を感じさせるが、決して豪華では無い。まるで複本のような、それが紅梅文庫本ということになる。

(二) 本文の位相

若紫巻については、二〇一九年に藤本幸一氏によって藤原定家監督書写四半本若紫(以下、「新出四半本」と略)が紹介され、翌年三月に同氏による解題を付した高精細カラー写真版が刊行(11)、さらに同年十一月には、新美哲彦氏による詳細な検証結果「新出「若紫」巻の本文と巻末付裁「奥入」——定家監督書写四半本『源氏物語』との関係を中心に」(『中古文学』一〇六号所収)も発表された。

稿者もまた、室町後期における源氏学を牽引した三条西家、その三条西家の人々が「当流の本」として用いていた青表紙本は、定家の(四半本)ではなく、定家の(六半本)(散逸。大橋寛治氏蔵『藤原定家自筆奥入』に残存本文がみえるのみ)の流れを汲むものではなかったかと推論している立場から、この新出四半本との比較を通じて、若紫巻におけ

る青表紙諸本の位相を確認してみた。調査にあたって今回は特に、大島本以上に親しい本文である可能性があると新美論文が紹介した伏見本も取り上げてみた。また伊井春樹氏・加藤洋介氏等によって指摘されていることく⁽¹²⁾、大島本は訂正加筆によって定家本に近い本文になったと分析されている。そこで今回は新出四半本に対する諸本の位相を、(Ⅰ)本文訂正等を一切考慮せず本行だけで比較した場合と、(Ⅱ)本文訂正後の本文で比較した場合とではどのように変化するのか、二段階に分けて扱ってみた。

今回用いた諸本は次の八本である。(一)内に本稿で用いた略称と、略号(ゴチック)を挙げておく。なお紅梅文庫本と山岸明融本以外はすべて影印で処理した。

- ・ 個人蔵藤原定家監督書写四半本(新出四半本・**定**)藤本幸一監修『定家本 若紫』(二〇二〇年、八木書店刊)
- ・ 平安博物館蔵大島雅太郎氏旧蔵本(大島本・**大**)『大島本源氏物語第一卷』(一九九六年、角川書店刊)
- ・ 天理図書館蔵池田本(池田本・**池**)『新天理図書館善本叢書 第十三卷 源氏物語池田本二』(二〇一六年、八木書店刊)
- ・ 聖徳大学蔵吉田幸一氏旧蔵伏見天皇本(伏見本・**伏**)『源氏物語 二(伏見天皇本)』(一九九一年、古典文庫第五三三冊)

- ・ 日本大学所蔵三条西家証本(日大本・**日**)『日本大学蔵源氏物語 第一卷』(一九九四年、八木書店刊)
- ・ 天理図書館蔵伝肖柏筆本(肖柏本・**肖**)紙焼き
- ・ 個人蔵紅梅文庫旧蔵本(紅梅文庫本・**紅**)

- ・ 実践女子大学蔵山岸德平氏旧蔵伝明融等筆本(山岸明融本・**明**)

このうち鎌倉時代の写本とみられるのは、新出四半本・池田本・伏見本の三本である。池田本は旧蔵者の池田亀鑑氏によって大島本につぐ善本と評された写本であり、若紫巻も同本の基幹となる鎌倉期書写四十八冊のなかのひとつ

である。伏見本は青表紙本系と河内本系とが混在するが、若紫巻は青表紙本系で、かつ基幹となる鎌倉中期書写四十冊のひとつという。寄合書きで奥書識語無し。書名の由来は旧蔵者吉田幸一氏が鈴虫・夕霧巻を伏見天皇宸翰かと解説されたことによるようだが、その後氏は「即断に過ぎた」と撤回された⁽¹³⁾。だが伏見天皇か否かはさておき、書写年代については鎌倉期とみてよさそうである。

残り五冊は室町期の写本である。若紫巻の場合、大島本は宮川印のない補写の巻に相当する。そして最終丁は筆跡が異なっており、藤本氏の解説に拠ればこの部分は「底本の書風を残したものだ」という⁽¹⁴⁾。三条西家の家本となった日大本は、実隆最晩年の写本（夢浮橋に享祿四年実隆奥書）で、若紫は公条が書写したという。肖柏本には奥書・識語が無く、書名の由来は添付の極めによったもののようである。随所で日大本との接近を示すが、桐壺巻が現存することから、実隆が日大本の作成時に用いたとされる「夢庵所持之古本」（『実隆公記』）そのものでないことは明白である⁽¹⁵⁾。山岸明融本若紫の伝承書写者は「梶井殿」（琴山極札）。若紫の本文用紙には他よりもやや厚手の打紙用紙が用いられた。脱文

（表1）各冊若紫巻基本書誌

書名	書型	伝承書写者	本文最終丁	片面行数	主たる和歌書式	奥入の有無	付箋乃至注記等の有無
定家監督書写四半本	四半本	伝定家	61ウ	8・9・10	A	○	○
池田本	六半本	（甲筆）	65ウ	11統一	B・C	×	○
伏見本	六半本		65才	10統一	A	×	×
日大本	六半本	伝公条	64才	10統一	B	×	×
紅梅文庫本	六半本	（同一筆者）	64ウ	10統一	B	×	×
肖柏本	四半本	伝肖柏	54ウ	10統一	B	×	△
大島本	四半本	（宮河印）	59才	10統一	B	○	○
山岸文庫明融本	四半本	伝梶井殿	49ウ	10統一	B	×	○

（注）A…改行字下げ、行頭を揃えた二行独立分ち書き、後続の地の文が改行して続く形式

B…改行字下げ二行分ち書き。二行目は字下げせず、和歌のあとに地の文がそのまま続く形式

C…改行字下げ二行分ち書き。二行目は字下げせず、和歌のあとに地の文が改行して続く形式

が多く、漢字使用率が高く、送り仮名を省略することが多い。以上八本の若紫巻の基本書誌を(表1)にまとめておく。

【(六半本)との比較】

若紫は、定家の(六半本)すなわち『自筆本奥入』にも残存本文が確認できる巻である。そこで右の八本を(六半本)と比較したところ、本文異同は四箇所認められ、それぞれにおける異文と諸本の分布状況は以下ようになった。猶、漢字平仮名の表記の異同、仮名遣いによる異同は無視して、掲げておく。

1 えしも…**六・定**・大・日・紅・肖・池・伏

(。え)…明

2 すましきを…**六・定**・日・紅・肖・明・池・伏

すましきを…大

3 なりと…**六・定**・大・日・紅・池・伏

と…肖明

4 おほいためり…**六・定**・日・紅・池・伏

おもほいためり…大・肖・明

同じく定家監督書写本でありながら、「**六**」(六半本)と「**定**」(新出四半本)は、この若紫巻でも本文異同はみられなかった。

異同のみられた四例の異同は明融本・肖柏本・大島本といった室町期青表紙写本の個別的なものばかりであった。とはいえ、定家の(四半本)に近いとされてきた大島本が、4の「おほいためり」を「おもほいためり」とし、4に加えて

2に於いても、本来なら「すましきを」とすべきところを、一本のみ「すさましきを」としている点は注目される。加えてここは物語本文の最終丁部分で、それまでとは明らかに筆風が異なっており、しかもこの後に続く奥入部分では、再びもとの筆跡に戻っている。そのため藤本氏の解説によれば、底本の筆風に似せて書写したかとされるくだりである。もしそうなら尚更のこと、2と4も誤写ではなく底本通りであった可能性の方が強いのではあるまいか。またもし筆跡を似せて書写したのならば、当然字母も一致するはずである。

試みに、大島本と新出四半本の字母を比較して見よう。

(新出四半本)

久累遠以止於可之幾毛天安曾比奈利 武寸免奈止者多可者可利爾奈礼八心・・也寸久字知

(大島本)

久留遠以止遠可之幾毛天安曾比奈利 武春女奈止者多可八可利爾奈礼八心・・也春久宇地

不留末比

部多天奈幾左満爾 不之於幾奈止八衣之毛寸×末之幾遠 己礼者以止

布留万比

遍多天奈幾佐万丹 婦之於幾奈登八盈之毛春左末之幾遠 古連八以止

左満可者利堂累加之川幾久左奈利止 於保×以堂免利 (新出四半本)

佐万可八利多留加之徒幾久左奈利登 於毛本以多女利 (大島本)

大島本の「記号以降が筆跡を似せたとされる最終丁であり、ゴチックにした部分が字母の異同箇所である。新出四半本との字母の相違は合計三〇文字、最終丁においても字母の異同は確認できた。ということは、底本の筆跡に似せ

たという前提に立つならば、少なくともこの新出四半本は大島本の直接の底本ではなかったことになる。先の新見論文によれば新出四半本には若干の独自異文が見られることから、同本は現行諸本の直接の祖本では無いだろうという判断を示された。だがその独自異文の多くは誤写とみられるものである。定家本なら明らかな誤写でもそのまま転写するという意識が果たしてどこまで浸透していたのか、それが曖昧なため、稿者には皆無とまで言い切る自信は無いが、少なくとも大島本に関しては、新出四半本は直接の底本では無いと思われた。

再び〈六半本〉に戻る。異同の見られなかった日大本・紅梅文庫本・池田本・伏見本の四本は字母レベルではどうか、参考までに新出四半本も再掲しつつ、次に記してみる。なおこちらでのゴチックは〈六半本〉と字母が異なった箇所である。

（六半本）

久留遠以止於可之幾毛天安曾比奈利 武寸女奈止波多可者可利爾奈礼八心・・ 也寸久字知

（新出四半本）

久累遠以止於可之幾毛天安曾比奈利 武寸免奈止者多可者可利爾奈礼八心・・ 也寸久字知

（日大本）

久流遠以登於可之起毛天安曾比奈利 武寸女奈止波多可八可利爾奈礼者心・・ 屋春久字地

（紅梅文庫本）

久留遠以止遠可之幾毛天安曾比奈利 武春女奈止者多可波可利爾奈礼八心・・ 也春久字知

（池田本）

久累遠以止於可之幾毛天安曾比奈利 武寸免奈止波多可者可利爾奈礼半心・・ 也寿久字知

（伏見本）

久留越以止越可之幾毛天安曾比奈里 武寸免奈止者多加八可里爾奈連八古呂 也春久字知

不留未比 部多天奈幾佐未爾 婦之於幾奈止八衣之毛寸末之幾遠 己礼八以止

不留未比 部多天奈幾左満爾 不之於幾奈止八衣之毛寸末之幾遠 己礼者以止

布留末比 遍多天奈起佐万爾 布之於幾奈止八衣之毛寸末之幾遠 古連八以止
 布留末比 部多天奈幾左滿爾 婦之遠幾奈止八衣之毛春滿之幾遠 己連者以止
 布留滿比 部多天奈幾佐末仁 布志於幾奈止波衣之毛寸滿之幾越 古礼半以止
 不留万比 部堂天奈幾左滿爾 不之遠幾那止八衣之毛春末之幾越 古礼八以登

佐末加者利多留可之川幾久左奈利止 於保以堂女利 (六半本)
 左滿可者利堂累加之川幾久左奈利止 於保以堂免利 (新出四半本)
 佐万加八利多留加之徒幾久佐奈利登 於保以堂女利 (日大本)
 左滿加八利多留可之川幾久左奈利止 於保以多女利 (紅梅文庫本)
 左滿閑八里堂留閑之徒幾久左奈里止 於保以堂免里 (池田本)
 左滿可八利多累可之川幾久左那里止 於本以堂免里 (伏見本)

字母レベルまで完全に一致したものは無い。異同数の少ない順に列挙すると、新出四半本(一四文字)、紅梅文庫本(一七文字)、日本本(一八文字)、池田本(二四文字)、伏見本(三二文字)、「心」の仮名表記は「古、呂」で一文字とした)であった。(六半本)と新出四半本は共に定家監督書写本であることから、字母も似通ってきたのだろうが、三条西家の本文も又、紅梅文庫本・日本本共に、字母・本文異同いずれの場合においても(六半本)に近似していたといえそうである。

I : 新出「若紫」 との本文異同

諸本名	新出本との 異同数
日大本	117
伏見天皇本	140
大島本	155
紅梅文庫本	165
池田本	167
肖柏本	282
山岸明融本	432

新出本「若紫」(訂正後の本文)
に対する、諸本文の異同。

但し対校諸本は、本行のみを
対象とした(訂正補入を無視)

- 1本文異同は文節単位でカウントした。
- 2漢字片仮名表記法による相違は、異同として不採用。
- 3仮名遣いによる相違も、異同として不採用。
- 4音便による相違は、採用。
- 5送り仮名による相違は、「給ひて」「給はて」「給て」など、対校諸本間に異同が見られた場合のみ、採用。
- 6「二条院」「二条の院」などの相違は、採用。

II : 新出「若紫」 との本文異同

諸本名	新出本との 異同数
大島本	71
日大本	107
伏見本	118
池田本	132
紅梅文庫本	167
肖柏本	270
山岸明融本	374

新出本「若紫」(訂正後の本文)
に対する、諸本文の異同。

但し対校諸本は、訂正補入後
の本文で比較した

- 1本文異同は文節単位でカウントした。
- 2漢字片仮名表記法による相違は、異同として不採用。
- 3仮名遣いによる相違も、異同として不採用。
- 4音便による相違は、採用。
- 5送り仮名による相違は、「給ひて」「給はて」「給て」など、対校諸本間に異同が見られた場合のみ、採用。
- 6「二条院」「二条の院」などの相違は、採用。
- 7異文注記・振漢字・読み仮名など、注にかかわる傍書は無視した。

【若紫全体の本文異同】では「四半本」とではどうか、結果を上にて図示した。本行だけを比較した(I)の場合、新出四半本との異同数が最も少ないのは日大本であった。しかもその数値(一一七)は、伏見本(二四〇)や大島本(二五五)より遙かに少ない。レースに喩えるならば、新出四半本に最も近いのが日大本、第二グループの伏見本と大島本がそれに続き、更に第三グループの紅梅文庫本(二六五)と池田本(一六七)が接近戦、かなり離れて肖柏本(二八二)が、最後に明融本(四三二)ということになる。

ところが(Ⅱ)になると、大島本が異同数七一例で逆転首位に立ち、その後に日大本(一〇七)と伏見本(一一八)が続く結果になった。異同数の少ない上位三本という点では(Ⅰ)(Ⅱ)変わらないが、訂正後の大島本は定家本に急接近し、他の諸本を大きく引き離している。やはり若紫巻においても、大島本は訂正加筆によって定家の(四半本)に近づいたといえそうである。但し若紫の場合、大島本の本文訂正は底本によってなされたのか、それとも底本とは別の写本(その場合は底本よりは定家本に近い本文ということになる)によってなされたのかは不明である。

なお新見論文において、大島本以上に新出四半本に近似している可能性があるとされた伏見本だが、例えば当初稿者が六本の校合本と比較して得たところの新出四半本の独自異文は十例あったのだが、新たに伏見本を加えると、そのなかの二例が伏見本と一致し、新出四半本の独自異文数は八例となった⁽¹⁶⁾。そういう意味では伏見本はなかなか興味深い本文である。とはいっても、全体的に見ると伏見本には細々とした異同が散見されるのであって、結果(Ⅰ)(Ⅱ)いずれにおいても日大本の異同数の方が少なくなった。日大本若紫は室町期の写本とはいえ、その底本は伏見本や池田本といった鎌倉期の写本よりも定家本に近かったということなのだろう。

一方、紅梅文庫本はどうかと云えば、(Ⅰ)(Ⅱ)どちらも日大本より異同数が多い。ということは、三条西家の本文史のなかでみた場合、若紫巻における定家の(四半本)との距離は、初期の本文より後期になってからの方が近づいたということのようである。

なお紅梅文庫の異同数は(Ⅰ)の一六五例から(Ⅱ)の一六七例へと、若干だが(Ⅱ)の方が増えている。では他の諸本はどうか、(Ⅰ)の異同数から(Ⅱ)の異同数を引いた数値は次のようになった。

・大島本(八四例)・山岸明融本(五八例)・池田本(三五例)・伏見本(二二例)・日大本(一〇例)・紅梅文庫本(マ
イナス二例)・肖柏本(マイナス三八例)

大島本から日大本までは、程度の差こそあるものの、いずれも訂正によって新出四半本の本文に近づいたといえる。ところが肖柏本と紅梅文庫本は、訂正によって逆に新出四半本から離れてしまったわけである。特に肖柏本は差が大きい。まるで(Ⅱ)において他の本文が介入した可能性を示唆しているかのようなのである。

以上はあくまでも、対校本七冊それぞれの新出定家本に対する距離を、表記法による異同等は捨象して検討した結果である。参考までに、表記法を重視し *Neuman* による計量的な処理法を用いて写本間相互の距離を測った前掲齊藤④によれば、日大本と池田本の若紫は「本文は非常に似ている」、大島本もまた「これら二写本と大島本との写本間距離は相対的に近いと言え、互いに本文は似ている」とのことであった。齊藤氏の方法は本行のみを対象としたものだが、写本間相互の親疎関係を測る重要な示唆を与えてくれるものと思われる。

(三) 本文訂正と書き入れ

【本文に対する墨筆書き入れ】

紅梅文庫本は書影をみる限り、手沢本としてあれこれ自由に書き入れを施されてきた写本では決して無い。とはいふものの、書き入れが皆無というわけではなく、墨筆によるそれは全部で二一例を数えた。今それらを(表2)に一括するが、大別すると次のようになる。

- | | |
|-----------------------------|------|
| (一) 補入・見せ消し記号を付しての〈本文訂正〉 | ……九例 |
| (二) 記号を記さず、ただ異文を傍書しただけの〈傍書〉 | ……九例 |
| (三) 尻付き「イ」を付した〈異文注記〉 | ……三例 |

右以外、語句解説や主語・引歌の明示といった類いの注釈は一切無い。(一)と(三)は書入れ者の意図が明白だが、(二)の傍書だけは、本行を直そうとして記号を付け忘れたのか、訂正するまでには至らないが参考までに異文を示そうとしたのか、不明である。またそれらの筆跡をみるに、それぞれに若干だが、本行書写者以外の筆かと思しきものも含まれており、(一) (三)は書入れ者による相違とも言えないようである。以下、これらを一覧表にして掲げる。

(表2) 紅梅文庫本若紫の墨筆書入れ

- ・ 上から順に、1 通し番号、2 紅梅文庫本の丁数、3 『源氏物語大成』頁数と行数、4 分類、5 別筆、6 紅梅文庫本本文、7 訂正前と本文の諸本、8 訂正後と本文の諸本、以上八列に分けて作成した。
- ・ 5 列目「別筆」では、本行書写者とは別筆かと判断したものに○印を付しておいた。
- ・ 6 列目「紅梅本本文」では、紅梅文庫本の該当する箇所を掲げた。文意が通りやすいよう、前後の文章を含めて抽出しておいたが、7・8 列目に直接係わる箇所についてはゴチック体で示しておいた。
- ・ 7 列目「訂正前と本文の諸本」では、本行部分が紅梅文庫本の本文(6 列目のゴチック部分)と本文だった諸本の略号を、8 列目「訂正後と本文の諸本」では、本行部分が、紅梅文庫本の修正後の本文もしくは傍記・異文注記と一致した諸本の略号を掲げた。その際、各本における仮名遣いや漢字仮名表記の違いは無視した。また明らかな異同とまでは言えない諸本についても項目を改め、頭に「cf」を冠して掲げておいた。例えば「侍る」「侍り」「侍」の場合、「侍り」と「侍る」とでは明らかに異文だが、「侍」のみの場合は「侍り」だったか「侍る」だったか曖昧といった例である。

(表2)

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	1
28 ウ	26 ウ	22 ウ	20 才	19 才	16 ウ	12 才	7 ウ	5 才	2 ウ	1 ウ	2 紅本
一七〇 ⑫	一六九 ⑨	一六六 ⑧	同 ⑪	一六四 ⑤	一六二 ⑦	一五九 ④	一五五 ⑫	一五三 ⑬	一五二 ④	一五一 ⑨	3 大成
傍書	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	傍書	異文	傍書	訂正	異文	4 分類
					○						5 別筆
6 紅梅本文											
7 訂正前と同文の諸本											
8 訂正後と同文の諸本											
いとかるありさま(きい)もな らひ給はす おなしこし葉(。かき)な れと ふかき(山)さとは かのこし葉かきのほ(もい) とに てらにこもり侍り(ル)と は かのおは(。北ノ方)に あまきみ(。いて)ひか事 き、給つる のたまはせきこえさする も(。あさくはいかゝと 山水に心もとまり侍ぬれ と おほしたり(。そのゝちは) ひゝなあそひにも いとくるしくおもはずに (おほえ給ふ)	ありさまも…定大日肖明 池伏	御ありきも…(尾)	かゝるありさま(きい)もな らひ給はす おなしこし葉(。かき)な れと ふかき(山)さとは かのこし葉かきのほ(もい) とに てらにこもり侍り(ル)と は かのおは(。北ノ方)に あまきみ(。いて)ひか事 き、給つる のたまはせきこえさする も(。あさくはいかゝと 山水に心もとまり侍ぬれ と おほしたり(。そのゝちは) ひゝなあそひにも いとくるしくおもはずに (おほえ給ふ)	あまきみ(。いて)ひか事 き、給つる のたまはせきこえさする も(。あさくはいかゝと 山水に心もとまり侍ぬれ と おほしたり(。そのゝちは) ひゝなあそひにも いとくるしくおもはずに (おほえ給ふ)	あまきみ(。いて)ひか事 き、給つる のたまはせきこえさする も(。あさくはいかゝと 山水に心もとまり侍ぬれ と おほしたり(。そのゝちは) ひゝなあそひにも いとくるしくおもはずに (おほえ給ふ)	あまきみ(。いて)ひか事 き、給つる のたまはせきこえさする も(。あさくはいかゝと 山水に心もとまり侍ぬれ と おほしたり(。そのゝちは) ひゝなあそひにも いとくるしくおもはずに (おほえ給ふ)	あまきみ(。いて)ひか事 き、給つる のたまはせきこえさする も(。あさくはいかゝと 山水に心もとまり侍ぬれ と おほしたり(。そのゝちは) ひゝなあそひにも いとくるしくおもはずに (おほえ給ふ)	あまきみ(。いて)ひか事 き、給つる のたまはせきこえさする も(。あさくはいかゝと 山水に心もとまり侍ぬれ と おほしたり(。そのゝちは) ひゝなあそひにも いとくるしくおもはずに (おほえ給ふ)	あまきみ(。いて)ひか事 き、給つる のたまはせきこえさする も(。あさくはいかゝと 山水に心もとまり侍ぬれ と おほしたり(。そのゝちは) ひゝなあそひにも いとくるしくおもはずに (おほえ給ふ)	あまきみ(。いて)ひか事 き、給つる のたまはせきこえさする も(。あさくはいかゝと 山水に心もとまり侍ぬれ と おほしたり(。そのゝちは) ひゝなあそひにも いとくるしくおもはずに (おほえ給ふ)	あまきみ(。いて)ひか事 き、給つる のたまはせきこえさする も(。あさくはいかゝと 山水に心もとまり侍ぬれ と おほしたり(。そのゝちは) ひゝなあそひにも いとくるしくおもはずに (おほえ給ふ)

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
62 才	55 ウ	54 ウ	53 才	51 才	41 ウ	37 ウ	37 ウ	37 ウ	29 才
一九四 ①	一八九 ⑩	一八八 ⑭	一八七 ⑬	一八六 ⑩	一七九 ⑭	同 ⑤	同 ②	一七七 ①	一七一 ④
傍書	訂正	傍書	傍書	傍書	傍書	訂正	傍書	訂正	異文
○						○		○	
いとわかいわけなけれと	そのさきに（物ひとこと）きこえをかんとして	すきかましきやうなるへき事（りとも）	あはれにおほしやられるとは（さて）	ゆくさきの身のあらんことなとまでも（ハ）おほししらす	りやせん	恋しくもまたみ（は）をとしかは（。少納言）とふらひて侍	おもひたち給へるを（みちに）しくれめいて	心ほそくて（。おきふし）なけきたまふ	とさまかうさまに心みきこゆるほと（をイ）
池伏（尾）	わかかれと…定大日明池伏	やうなるへきこと…定大日明池伏 cf かへい事…（尾）	おほしやられると…定大日明池伏（尾）	ことなとまでも…定大日明池伏 cf さまなとさても…（尾）	またみをとりにやせん…肖明	（ナシ）…定大日明池伏	おもひたち給へるを…定大日明池伏	（ナシ）…定大日明池伏	きこゆるほと…定日池伏 きこゆるほと（は）と…大 cf きこゆるほと（は）に…（尾）
いわけなけれと…（ナシ）	物ひとこと…肖（尾）	やうなりとも…（ナシ）	明 おほしやられるは…（ナシ） cf おもほしやられると…	ことなとまでは…（ナシ）	またみはおとりやせむ…定大日池伏（尾）	少納言…（尾）	おもひたち給へるみちに…（尾）	おきふし…（尾）	きこゆるを…肖明

紅梅文庫本の訂正前本文と訂正後の本文、それぞれにおける諸本との一致度という観点からみて、先の(表2)に掲げた二一例は次の三つに大別できるように思う。

(イ) 紅梅文庫本が本文訂正等によってそれまでの非青表紙本系から青表紙本系本文に戻った例…一例

(ロ) 青表紙本系だった紅梅文庫本が、本文訂正等によって非青表紙本系本文となった例…一二例

(ハ) もともと青表紙本系諸本間で本文が対立していた箇所を、紅梅文庫本が一方から他方へと移った例…七例

(イ) に該当するのは、次の一例(通番号9)である。

9 山水に心もとまり侍ぬれと(紅梅文庫本22ウ・『大成』一六六頁⑧行目)

紅梅文庫本は本行「心も」の「も」の傍に「ヒ」と見せ消し記号を付している。このくんだり、「心も」とあるのは河内本系の尾州家本のみで、他の青表紙本系諸本はすべて「心」となっている。おそらくここは紅梅文庫本の誤写であり、それを補正したものと思われる。

(ロ) に該当するのは、次の一二例(1・2・3・7・11・13・14・15・17・18・19・21)である。例えば通番号2の場合、
2 おなしこし葉。かきなれと(2ウ・『大成』二五二④)

これは「こし葉」という本行に、補入記号を付けて「かき」と訂正している。このくんだり、青表紙諸本は「こし葉」で一致しており、「こしはかき」とするのは尾州家本だけであった。このように、訂正結果(ないしは異文注記や傍書の本文)が尾州家本とのみ一致している場合が、一二例中実に五例(2・11・13・14・15)にものぼり、うち(13・15)は紅梅文庫本の後筆かと疑われた書入れである。なお、訂正後の本文と同じ本文をもつ諸本が見つけられなかった例も、五例(3・17・18・19・21)あり、この場合紅梅文庫本はすべて〈傍書〉形式で加えられている。

(ハ)に該当するのは、七例(4・6・8・10・12・16・20)である。例えば通番号4の場合、

4 かのこし葉かきのほ(もイ)とに(7ウ・『大成』一五五頁⑫行目)

紅梅文庫本は「こし葉かきのほ」といいう本行に対して、「こし葉かきのもと」といいう異文があったと注記している。このくんだり、青表紙本系諸本は「ほと」とある定家本・大島本・伏見本・明融本グループと、「もと」とある日大本・肖柏本・池田本グループとに分かれており、後者には尾州家本も加わっている。紅梅文庫本は定家本グループの本行に、日大本・肖柏本グループの異文を注記したことになるのだろう。もう一例挙げよう。

6 かのおは(。北の方)に(16ウ・『大成』一六二頁⑦行目)

この書入れ訂正も別筆の疑いがあるので、訂正後の本文は肖柏本や尾州家本と重なっている。どうやら書入れられた部分は、尾州家本について肖柏本にも親しいようである。試みに全二一例を通じての、紅梅文庫本の本文との一致数、訂正後(ないしは傍書・異文注記)の本文との一致数を確認してみた。(表3)がその結果である。

(表3) 紅梅文庫本書き入れ箇所における諸本との一致数

本行との一致数		訂正(傍書・異文注記)の本文との一致数	
新出定家本四半本		(尾州家本)	
大島本・伏見本		(該当スル諸本ナシ)	
日大本・池田本		肖柏本	
山岸明融本		日大本・池田本	
肖柏本		山岸明融本	
(尾州家本)		新出定家本・大島本・伏見本	
.. 一九回		.. 一二例	
.. 一八回		.. 七例	
.. 一七回		.. 七例	
.. 一五回		.. 四例	
.. 一三回		.. 三例	
.. 五回		.. 二例	

紅梅文庫本の書き入れは僅かだが、そこには尾州家本などの非青表紙本系本文が大きな影響を与えていることが判った。その分、定家の本文系列から離れてしまったわけである。とはいってもその若紫巻全体で比べてみると、尾州家本との本文異同はこのように些細なものではない。にもかかわらず、実際にはそのなかの極く僅かしか採り上げられていない。ということは、どうやら尾州家本を直接披見しての校合書き入れでは無さそうである。祖本や底本に記されてあったものが伝わってきた可能性、紅梅文庫本の段階で何らかのフィルターを通して加えられていった可能性、その両方が考えられそうである。

また通番号3の場合、紅梅文庫本は本行「ふかきさとは」の傍らに「山」と傍書しているのだが、「ふかき山さとは」とする諸本は見当たらないものの、肖柏本だけは「ふかき山さとは」として「山」を見消ちになっている。更に通番号6や10のように、紅梅文庫本の補入句「北ノ方」「そのゝは」を支持する諸本が、尾州家本と肖柏本だったという例もある。青表紙本系諸本のなかでみると、紅梅文庫本の書入れには肖柏本の影響が濃厚である。

そもそも紅梅文庫本の祖本となった〈文明本〉は、文明十七年閏三月から向こう二年間にわたって宗祇や肖柏の源氏講釈を受講していた時の、実隆自身の手沢本となった写本だった。その間〈文明本〉が宗祇本や肖柏本と接触していた可能性もあり、それが紅梅文庫本にも影を落としたという図式も、状況的に見てあり得ないことでもないように思われた。

【朱墨による鈎点】

紅梅文庫本若紫に加えられた朱筆書入れには、鈎点（一三箇所）と朱点（二〇箇所）の二種類がある。両者は朱墨の濃度や穂先を異にしていることから、それぞれ別々に付されたもののようである。朱点は、朱点と云うよりはむしろベタに近い朱墨である。文字の上にも打たれており、そのため下の文字が見えにくくなった箇所もあるなど、些か乱暴

な打ちようである。そして前半八丁才に集中し、青表紙本系諸本の対立箇所被打たれている。該書の本文を分析するために、後代になって加えられたかという印象である。一方の鉤点は、多くの源氏写本と同様に引歌・引詩といった注釈に関連した箇所被打たれたものらしい。また濃い目の朱墨できっちり書き入れられている。次にこちらの鉤点箇所と、諸注釈書との関係を表(表4)にまとめてみた。鉤点箇所には、○印を付しておいた。

(表4) 紅梅文庫本朱筆鉤点(一三箇所)と諸注釈書

紅梅文庫本鉤点箇所(丁数・『大成』頁数・行数)	源氏	新出四	六半	紫	河海	三源	弄花	細流	明星	計
1やまのさくらは(1ウ・大成一五二頁⑧行目)				○	○	○	○	○	○	6
2しりへの山にいてたちて(3ウ・一五二⑬)				○	○	○		○	○	5
3草のむしろも(12オ・一五九⑤)				○	○	○				3
4くらきにいりても(18オ・一六三⑤)	○	○	○	○	○		○	○	○	8
5ときありてひとたひ、らくなる(23オ・一六六⑭)				○	○	○	○	○	○	6
6とよらのてらのにになるや(25オ・一六八⑨)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
7とはぬはつらきものにや(28ウ・一七〇⑭)	○		○	○	○	○	○	○	○	8
8よしやいのちたにとて(29オ・一七一⑤)			○	○	○		○	○	○	6
9くらふの山にやとりも(33オ・一七四④)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
10ありしにまさるものおもひ(37オ・一七六⑭)				○	○	○		○	○	5
11おなし人にやと(41ウ・一七九⑦)	○	○	○	○	○	○		○	○	7
12なそこえさらんと(44ウ・一八一⑭)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
13むさしのといへは(61オ・一九三⑥)	○		○	○	○	○		○	○	7
小計	7	5	8	13	13	11	8	11	12	

なお右のなかには、見出し語のみで具体的な注釈が無いもの、注釈書の見出しの本文が紅梅文庫の鈎点のくだりと正確には一致しない例も含ませている。また『山水』は若紫巻の途中で六丁ほどの白紙が入るため、割愛した。

その結果、一三例すべてにおいて合致したのは『紫明抄』と『河海抄』であった（『花鳥余情』は1・9・10の三例で合致）。それに対して三条西家の注釈書といえ、例えば『弄花抄』には僅か八例しかなく、『細流抄』そして『明星抄』と進んでいくにつれて一致数も増加して、『明星抄』になると一二例まで一致した。それでも一例、一致しない例（通番号3）が残っている。

参考までに日大本の場合を見てみると、鈎点箇所は全部で一〇箇所（うち六例は紅梅文庫本と一致、四例が新出）あり、すべて『明星抄』と一致していた¹⁷⁾。このように見てくるならば、実隆の〈文明本〉を祖本とする紅梅文庫本だが、そこに記された鈎点は、三条西家関連の注釈書では無く、『紫明抄』や『河海抄』の反映だったということになる。なぜそうなったのだろうか。

それをみるために、〈文明本〉と三条西家の注釈書との関係、そして実隆〈文明本〉と『河海抄』『紫明抄』の関係をおさえておこう。

前者については比較的明白である。実隆が〈文明本〉を売却した永正三年（一五〇六）八月二十二日以前の記事に

「若菜上覧之。肖柏聞書少々抄出之了」（『実隆公記』文亀四年三月二十七日条）

「肖聞校合了」（同右、同年八月二十二日条）

とあり、伊井春樹氏に拠れば、これらは宗祇の講釈を聴聞した肖柏がまとめたところの「肖柏聞書」を、実隆が借用して抄出・校合したことを示した記事であり、この時まとめられたのが所謂〈第一次弄花抄〉だろうこと、そして現存する『弄花抄』は第二次本で、その成立は永正七年（一五一〇）とされている¹⁸⁾。つまり〈文明本〉の段階では、『細流抄』『明

星抄』は無論のこと、『弄花抄』ですら第二次本は未だ誕生していなかったことになる。〈文明本〉のなかにそれらが反映されることはありえなかったわけである。

では『河海抄』や『紫明抄』との関係はどうだったろうか。例えば、覆勘本系『河海抄』の奥書・識語の中に見える次の一文

文明四年壬辰夏之比借請彼本〔源重相自筆〕率馳短毫畢云疎紙之惡筆旁以後見多其憚早可令清書者也努々于時鳥路含梅雨蟬声送麦秋候向竹窓之下終出来之功而已矣」(天理図書館蔵『河海抄』二二五六)

について、中院通勝は「源重相」のくだりに「通秀公也」、文末には「左少将藤臣〔判道遙院也〕」と加え、更に「以右筆」(本)書写了 天正十七 仲春十三 素然(花押)」と追記している⁽¹⁹⁾。ということは、素然(中院通勝)の証言に拠れば、既に文明四年(一四七二、実隆十八歳)夏頃、実隆は素然の祖にあたる内大臣中院通秀(肖柏の兄)自筆の「源重相自筆」河海抄を書写していたことになる。

こうした経験を評価されたからだろう。実隆は文明十三年(一四八二)正月四日には、御前にて禁裏本河海抄を校閲し(「於御前、河海抄〔二帖〕相違之所々直付之」、明応五年(一四九六)十月三日には富小路俊通に「三源一覽」編集の相談をうけている⁽²⁰⁾。そして十一月二十六日、実隆は序文と銘の揮毫を依頼されたようで(「抑俊通朝臣花鳥余情與河海抄一具書之、企抄出、銘併序事先日所望之。今日閑暇之間草遣之。注左：」)とある。「注左」以下が俊通に送った序文の写しなのだが、そのなかから『紫明抄』について言及している箇所を抜粋してみよう。

抑も四辻の宮の御抄は、おほくは素寂か紫明抄をひきうつされ、素寂か抄は又そのかみ(ヨリ歟)のもろく、の説をあはせのせたり。しかれはいま別に諸家の注解をかんかふるにをよはすといへとも、紫明抄のうち、河海にもれたる所も、もしとりもちゐて詮要たらんことをは、さらにこれをくはへ…、(『実隆公記』)

これによれば、『河海抄』には『紫明抄』からの引用が多いこと、『紫明抄』は古くからの諸説を載せていること、よって『紫明抄』にある項目で『河海抄』に漏れたものであっても、詮要な項目の場合はこれを加えたところである。どうやら『紫明抄』を加えたのは実隆の案だったようで、彼は『河海抄』のみならず『紫明抄』にも関心を寄せていたことが窺われる。『三源一覽』関連事項は伏見宮家の「上臈局本」が成立した翌年のことではある。しかしそれ以前から関心を寄せていなければ、『三源一覽』への協力は叶わなかっただろう。実隆は早くから『河海抄』『紫明抄』にも目配りを怠らず、それが〈文明本〉の鈎点となつて紅梅文庫本に伝わったのかもしれない。

以上、推論部分を省き、把握できた事実だけをまとめると次のようになる。

- 一、紅梅文庫本の用紙は非叩解紙であつたこと。
- 一、三条西家の本文は日大本・紅梅文庫本ともに、新出の〈四半本〉よりも〈六半本〉に親しかつたこと。
- 一、新出四半本との本文異同数は、訂正以前の本文と比較すると大島本より日大本の方が少なかったが、訂正以後の本文と比較すると大島本が逆転すること。また新出四半本との異同数は、紅梅文庫本より日大本の方が少ないこと。
- 一、紅梅文庫本の書き入れ(本文訂正・傍書・異文表示)には、尾州家本や肖柏本との共通性が強くみられること。
- 一、紅梅文庫本の朱筆鈎点は、三条西家の注釈書よりも『紫明抄』『河海抄』と一致していたこと。

注

- (1) 拙著『源氏物語三条西家本の世界―室町時代享受史の一樣相』(二〇一九年、武蔵野書院)
- (2) 加藤洋介「大島本源氏物語の本文成立事情―若菜下巻の場合」(二〇〇九年、和泉書院『大島本源氏物語の再検討』所収)。
- (3) 『日本古典籍書誌学辞典』(一九九九年、岩波書店)「打紙」「熟紙」項参照。

- (4) 小野晃嗣『日本産業発達史の研究』（一九八一年 法政大学出版会）によれば「中世に於て最も高価な紙は鳥子類であり、文明年間に於ては鳥子一枚代は八文或は九文四分強の高価さを示している。…（中略）さればこそ公家階級に於てもこれを使用することは稀で、永久保存を要する書冊巻数等の場合にのみ多くこれを使用したのである。」（七六頁）とある。
- (5) 高田信敬『文献学の栞』（二〇二〇年、武蔵野書院）一五五頁。
- (6) なお実隆筆本に関連して、同報告の興味深い報告を紹介しておく、実隆筆者本に近い仮名字母の使い方をしている写本として、書陵部本「帚木」（伝承筆者「梶井殿」）があること、また書陵部本「桐壺」と大正大学本「空蟬」（伝承筆者は共に近衛政家）の距離も近く、書陵部本・大正大学本、そして保坂本のなかの補写本の中には、共通の書写者が存在する可能性があるという。
- (7) 『実隆公記』明応四年六月二八日条。
- (8) 実隆が伏見宮家本を借用し転写したことは『実隆公記』永正九年六月一二日条「伏見殿南御方、源氏本申出、十帖給了」を初めとして、その後も同月一三日、さらには（永正本）を売却した一〇日後の永正一七年三月一七日、そして同月一九日、四月六・一七日条等に見える。因みに永正六年八月二八日条によれば、貞敦親王室三条香子の上臈局と呼んでいる。すると永正九年の借用記事にある「南御方本」とは今出川教季女のことであり、彼女は既に上臈局から南御方に変わっていたものと思われる。また実隆にとつて三度目のテキストとなった（大永本）の成立は永正一八年（一二二一）一〇月頃かと思われる。
- (9) 科研費による本文研究会（令和元年二月三〇日 NOON 会議）にての口頭発表。今年度中に報告書を刊行予定である。
- (10) 『実隆公記』大永三年（一二五三）閏三月七日条に「帥、今日於伏見殿桐壺巻説申」とあり、以後「帥」（公条は大永五年六月一二日まで通い続けて終了した）。
- (11) 大河内元冬監修・藤本孝一解題『定家本源氏物語若紫』（二〇二〇年三月、八木書店）
- (12) 伊井春樹「大島本源氏物語本文の意義と校訂方法」（一九九九年、新典社『論叢源氏物語1 本文の様相』所収）、加藤論文は注（2）参照のこと。
- (13) 「追記細説」（平成三年、古典文庫第五三三『伏見本源氏物語 一二』所収）。
- (14) 藤本孝一「大島本源氏物語の書誌的研究」（平成九年、角川書店『大島本源氏物語 別巻』所収）。
- (15) 日大本を作成するときに実隆が借用した「肖柏所持古本」は桐壺巻を欠いていたようで、公条書写の大永本と校合する時に

は、やむなく飛鳥井雅康筆本を利用したらしく、日本本桐壺の校合識語には「享祿三年六月廿七日読合入落字等了（古本闕故雅康卿筆也）」とある。

(16) 伏見本を加えた結果、新出四半本（訂正以後の本文）の独自異文は、以下の八例である。なお諸本の本文を掲示する際、表記法による相違は割愛した。

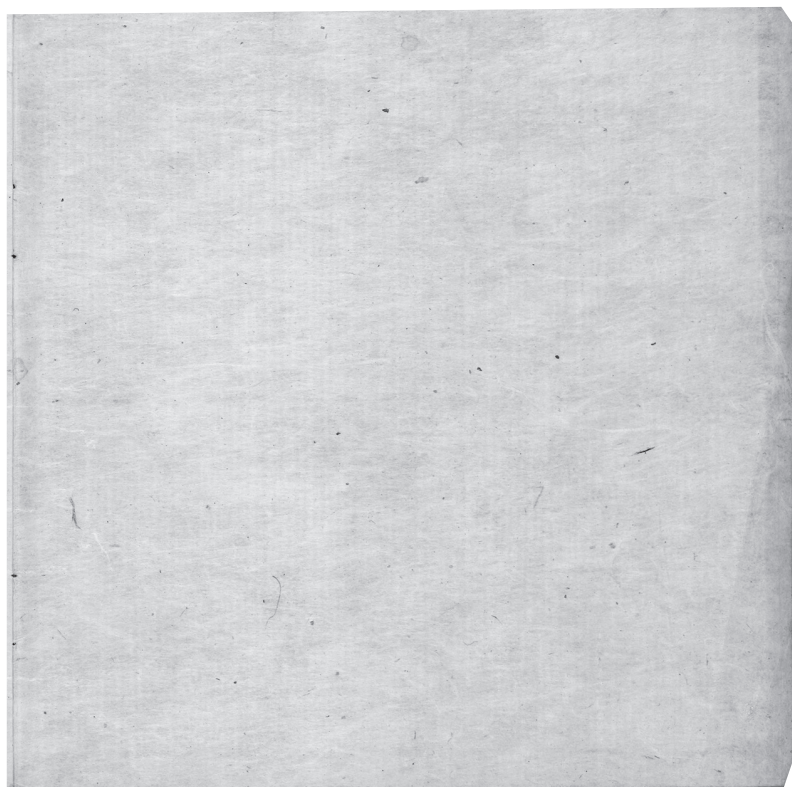
- ・ かやうやうなる人（四半本12オ・大成一五九⑦行目）※四半本は「かや」の「や」に墨の汚れあり。あるいは見せ消ちか。諸本は「かやうなる人」大肖明池伏／「かうやうなる人」日紅。
- ・ をしのたまへは（15オ・一六一②）※四半本「おし」は「を」しあてに「の」誤写か。諸本「を」しあてに「の」誤写か。
- ・ みたまて（二二丁オ・一六七③）※諸本「見給て」大肖紅伏／「補入」明／（ナシ）日池。四半本は「みたまひて」の誤写か。
- ・ 御心さしあらは（二二ウ・一六七⑪）※諸本「もし御心さしあらは」。
- ・ みしほとおもひやるも（二九オ・一七二⑬）※四半本の「みしほと」、諸本は「見しほとを」とする。
- ・ まとの（四六ウ・一八四⑩）※諸本「まことの」。四半本の誤写か。
- ・ たつねいて給つらむも（五四ウ・一八九②）※四半本の「給つらむも」、諸本は「給へらむも」大日肖紅池／「給らんも」明・少納も（五九ウ・一九四⑤）※諸本「少納言も」。四半本の誤写か。
- (17) 但し「くさのとさしにさはりしもせしと」（紅梅文庫44ウ）は、その注釈内容から「立ちとまり」項の注釈と判断した。
- (18) 伊井春樹「肖柏の源氏学とその発展」（昭和五五年、桜楓社「源氏物語注釈史の研究」所収）。
- (19) 熊本大学付属図書館蔵「河海抄」卷一奥書識語。
- (20) 「三源一覽」の経緯について、『実隆公記』では初出記事に「俊通朝臣来、河海花鳥両部一具、可抄出之支度也。其事相談之、愚存分粗示之了」（明応五年一〇月三日条）とあり、俊通自身は当初「河海抄」と「花鳥余情」の両本のみを対象としていたことが窺われる。日記にはその後も一二月二〇日・二三日・二六日と関連記事が続き、一月二六日頃に完成したものと思われる。

【付記】

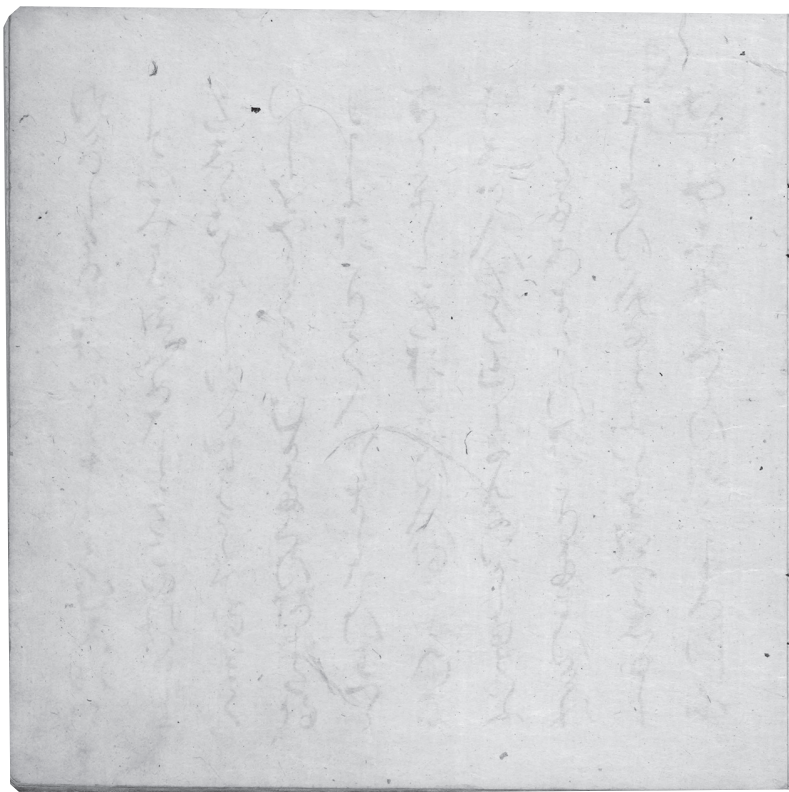
本研究はJSPS科研費JP19K13063の助成を受けた研究成果の一部である。



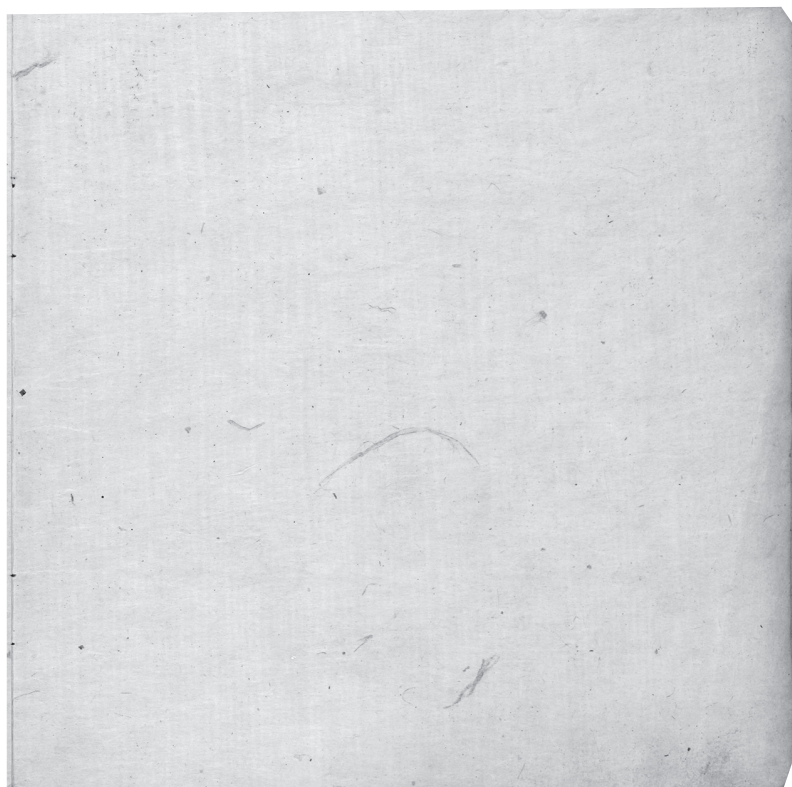
紅梅文庫旧蔵本若紫卷 表紙



(前見返し)



(前遊紙 1才)



(前遊紙 1ウ)

わがやみ甘きいほくしりふ
ちういほくしりふをほくしりふ
なくあめしりふいたるあめしりふ
しあつ人きいほくしりふあめしりふ
あしあしきいほくしりふあめしりふ
しあめしりふあめしりふあめしりふ
いしあめしりふあめしりふあめしりふ
きあめしりふあめしりふあめしりふ
しあめしりふあめしりふあめしりふ
しあめしりふあめしりふあめしりふ

いふまでもなく、
あめいふれまんとのほろいひいじや
しきふんうりふすまふ月
しきやゆふうあふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふりふり
ふりふりふりふりふりふりふり

あつちのちのちの中よりつとぬ
そらゝの海のゆりほろみきこえと
流るゝいふあゝやのきこえと
きこえぬあゝあゝやのきこえ
ゆりやたりやふんやふんこれの
事と思ふ人稀くあんなこの世にない
むすこもこれとほといふあゝあゝ
ちりやんとわたりやふんやふん
はみよとつとつとあゝとさといふこ
めりやうやうやうやうやうやうや

そとまゝのりらゐるは日た
けあらぬとて休いてみま
けぬとてさきさきとてこ
けとてめとてみねとてあ
つらけりのとてとてとて
とてとてとてとてとてと
とてとてとてとてとてと
とてとてとてとてとてと
とてとてとてとてとてと
とてとてとてとてとてと

とほりんちのふゆのうへにふゆも
ふゆのうへにふゆもふゆの
ふゆのうへにふゆのふゆの
ふゆのうへにふゆのふゆの
ふゆのうへにふゆのふゆの
ふゆのうへにふゆのふゆの
ふゆのうへにふゆのふゆの
ふゆのうへにふゆのふゆの
ふゆのうへにふゆのふゆの
ふゆのうへにふゆのふゆの

いづれもあつたはうして、
まゝに人々の世のむづかしいは
ういふことを人の中にもして、
はういふういふういふういふ
あつたういふういふういふ
ういふういふういふういふ
ういふういふういふういふ
ういふういふういふういふ
ういふういふういふういふ

[illegible]

[illegible]

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, arranged in ten horizontal lines. The script is dense and flowing, with varying line lengths and some ink bleed-through visible from the reverse side of the page.

けしきよくしてはあつ月おや
のほいといふまゝいふまゝあつ
ふきのいふまゝいふまゝあつ
いふまゝいふまゝいふまゝあつ
いふまゝいふまゝいふまゝあつ
いふまゝいふまゝいふまゝあつ
いふまゝいふまゝいふまゝあつ
いふまゝいふまゝいふまゝあつ
いふまゝいふまゝいふまゝあつ
いふまゝいふまゝいふまゝあつ

しなむらあはれなるあはれ人なりては
あはれなるあはれなるあはれなる
はつらつあはれなるあはれなる
くあはれなるあはれなるあはれ
なりてはあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる

あはれ、ふりていふ、ふりていふ
あはれ、ふりていふ、ふりていふ
あはれ、ふりていふ、ふりていふ
あはれ、ふりていふ、ふりていふ
あはれ、ふりていふ、ふりていふ
あはれ、ふりていふ、ふりていふ
あはれ、ふりていふ、ふりていふ
あはれ、ふりていふ、ふりていふ
あはれ、ふりていふ、ふりていふ
あはれ、ふりていふ、ふりていふ

すけいしといひてふるれりい
海にわたりてうきうきつるや
わらわらと人ほそきてふり
しゆりしといふやうに人あ
か納まれのうきうきつるや
うきうきといふやうに人あ
なやうといふやうに人あ
うきうきといふやうに人あ
わらわらといふやうに人あ
うきうきといふやうに人あ
うきうきといふやうに人あ

とくちやうてはつわりのつこ
いほくちやうてはつわりのつこ
つこちやうてはつわりのつこ
かんりいふてつわりのつこ
りき入るてつわりのつこ
つわりのつこちやうてはつわりのつこ
てつわりのつこちやうてはつわりのつこ
思ひあふてつわりのつこ
つわりのつこちやうてはつわりのつこ
つわりのつこちやうてはつわりのつこ

もつてはあはれようあはれ
おのれはあはれいふもあはれ
こゝろあはれすこゝろあはれ
いふもあはれいふもあはれ
あはれいふもあはれいふも
いふもあはれいふもあはれ
あはれいふもあはれいふも
あはれいふもあはれいふも
あはれいふもあはれいふも
あはれいふもあはれいふも

[illegible]

いかにいふにいふにいふにいふにいふに
あやうきやうきやうきやうきやうきやうき
あやうきやうきやうきやうきやうきやうき
あやうきやうきやうきやうきやうきやうき
あやうきやうきやうきやうきやうきやうき
あやうきやうきやうきやうきやうきやうき
あやうきやうきやうきやうきやうきやうき
あやうきやうきやうきやうきやうきやうき
あやうきやうきやうきやうきやうきやうき
あやうきやうきやうきやうきやうきやうき

かきつらるゝあはれはまて人か
のちいしうあつてつらつたま
かやちりのかきあはれはま
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ

にけりていふもくはしむるは
とていふもくはしむるは
あまのいふもくはしむるは
くもさへんもくはしむるは
まもあはれもくはしむるは
けりていふもくはしむるは
つるもくはしむるは
いふもくはしむるは
くもさへんもくはしむるは
あまのいふもくはしむるは

るにふりてありてなりて
きけりていふなりて
ふりてふりてふりて
ふりてふりてふりて
ふりてふりてふりて
ふりてふりてふりて
ふりてふりてふりて
ふりてふりてふりて
ふりてふりてふりて
ふりてふりてふりて

わたりしあそびのうらなはわを
まかりしわがはらのうらなはわを
うらなはわのうらなはわを
うらなはわのうらなはわを
うらなはわのうらなはわを
うらなはわのうらなはわを
うらなはわのうらなはわを
うらなはわのうらなはわを
うらなはわのうらなはわを
うらなはわのうらなはわを

大納言らふてすつて今もかき
いふさやうの布意のてゝもあ
しやうとていふやうにあら
あはれきゝらふてあつていふ
いふやうのあはれきゝらふて
あつていふいふいふいふい
きゝらふていふいふいふい
やゝあはれきゝらふていふ
あつていふいふいふいふい
あつていふいふいふいふい

あまのこころをいふは
いふはこころをいふは
いふはこころをいふは
いふはこころをいふは
いふはこころをいふは
いふはこころをいふは
いふはこころをいふは
いふはこころをいふは
いふはこころをいふは
いふはこころをいふは

わらひはる人あかりもうきき
くあや—むうきやとたふき
はひもふのたまふいふきふりて
けしあふき—たふきのふき
ぬいふのいふき—あふき
いふき—いふき—あふき
たふきのあふき—いふき
きこいふき—いふき
あふき—いふき
いふき—いふき

すむこももぬくあやみにてあ
えれといふもさかたけあそ
ほりゆぬこひつりのあやこ
みこのけしきくあやこいふ
ものといふもさかたけあや
なりぬもさかたけあやこ
あやこもさかたけあやこ
さかたけあやこさかたけ
さかたけあやこさかたけ
さかたけあやこさかたけ
さかたけあやこさかたけ

しりやきついでふくすたのくまを
きこしりもろい^やもろいもろいもろい
ふじあふ^ふじあふ^ふじあふ^ふじあふ^ふ
あふ^ふい^ふい^ふい^ふい^ふい^ふい^ふ
やうい^ふい^ふい^ふい^ふい^ふい^ふ
ふふ人あふ^ふあふ^ふあふ^ふあふ^ふ
あふ^ふあふ^ふあふ^ふあふ^ふあふ^ふ
あふ^ふあふ^ふあふ^ふあふ^ふあふ^ふ
あふ^ふあふ^ふあふ^ふあふ^ふあふ^ふ
あふ^ふあふ^ふあふ^ふあふ^ふあふ^ふ

わがこゝろにこそしるべきをいふては
わがこゝろにこそしるべきをいふては
わがこゝろにこそしるべきをいふては
わがこゝろにこそしるべきをいふては
わがこゝろにこそしるべきをいふては
わがこゝろにこそしるべきをいふては
わがこゝろにこそしるべきをいふては
わがこゝろにこそしるべきをいふては
わがこゝろにこそしるべきをいふては
わがこゝろにこそしるべきをいふては

たわひくくわたりてふくふく
なりつのはくくくくくくくく
といふあふくくくくくくくく
こたふくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
ゆわくくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくくく
はくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

中くあはれいふくちしにいふれい
えはしきくちしにいふくちしにいふれい
やうきりあはれいしにいふくちしにいふれい
所をさくちしにいふくちしにいふれい
花のちりもさくちしにいふくちしにいふれい
やうきりあはれいしにいふくちしにいふれい
風しりあはれいしにいふくちしにいふれい
そちしにいふくちしにいふくちしにいふれい
うちしにいふくちしにいふくちしにいふれい
ちしにいふくちしにいふくちしにいふれい

けふもてふれありとていひなく
なりいふ人なりとていひなく
もてふれありとていひなく
にふれありとていひなく
もてふれありとていひなく
さるるなりとていひなく
あふれありとていひなく
ふれありとていひなく
すのふれありとていひなく
れのふれありとていひなく

とちちいりあちりーにちちいり
いりいりいりいりいりいりいり
いりいりいりいりいりいりいり
いりいりいりいりいりいりいり
いりいりいりいりいりいりいり
いりいりいりいりいりいりいり
いりいりいりいりいりいりいり
いりいりいりいりいりいりいり
いりいりいりいりいりいりいり
いりいりいりいりいりいりいり

[illegible]

おのやうにうゑにやうにうゑに
しりあうにうゑにうゑにうゑに
しりあうにうゑにうゑにうゑに
しりあうにうゑにうゑにうゑに
しりあうにうゑにうゑにうゑに
しりあうにうゑにうゑにうゑに
しりあうにうゑにうゑにうゑに
しりあうにうゑにうゑにうゑに
しりあうにうゑにうゑにうゑに
しりあうにうゑにうゑにうゑに

[illegible]

くつゝのふたなりふつゝのふたなり
いふふつゝのふたなりふつゝのふたなり
ふつゝのふたなりふつゝのふたなり
ふつゝのふたなりふつゝのふたなり
ふつゝのふたなりふつゝのふたなり
ふつゝのふたなりふつゝのふたなり
ふつゝのふたなりふつゝのふたなり
ふつゝのふたなりふつゝのふたなり
ふつゝのふたなりふつゝのふたなり
ふつゝのふたなりふつゝのふたなり

[illegible]

たふしといふはあまのうらみ
のうらみといふはあまのうらみ
のうらみといふはあまのうらみ
のうらみといふはあまのうらみ
のうらみといふはあまのうらみ
のうらみといふはあまのうらみ
のうらみといふはあまのうらみ
のうらみといふはあまのうらみ
のうらみといふはあまのうらみ
のうらみといふはあまのうらみ

あふちのうらふちのあふちの
うらふちのうらふちのうらふちの
うらふちのうらふちのうらふちの
うらふちのうらふちのうらふちの
うらふちのうらふちのうらふちの
うらふちのうらふちのうらふちの
うらふちのうらふちのうらふちの
うらふちのうらふちのうらふちの
うらふちのうらふちのうらふちの
うらふちのうらふちのうらふちの

かへいとおひやふにそへてさう
ゆゑあつと偽物しうこすりきこふ
か納ちしきさうこしきあひさうり
りてはほのほふぬにむかひあり
ふぬさうりこしき葉たふらん
つさくさうりこしき葉たふらん
はなはたしき葉たふらん
そきさうりこしき葉たふらん
はなはたしき葉たふらん
そきさうりこしき葉たふらん

あまのうゑの物ねいなりと
そにやうんいふれりなり
くさういふもいふなり
なかりとねいなり
とあまのうゑの物ねいなり
あまのうゑの物ねいなり
あまのうゑの物ねいなり
あまのうゑの物ねいなり
あまのうゑの物ねいなり
あまのうゑの物ねいなり

ねほりてはありきやうのそ
あはれきうはありきやうのそ
あはれきうはありきやうのそ
あはれきうはありきやうのそ
あはれきうはありきやうのそ
あはれきうはありきやうのそ
あはれきうはありきやうのそ
あはれきうはありきやうのそ
あはれきうはありきやうのそ
あはれきうはありきやうのそ

事とありあり二つもあまた
まゝ人の上もあまたのいふいふ
のりよひもあまたとてわら
りよひもあまたのいふいふ
もいふやうにわらわらと
まゝいふいふいふいふ
はうきうきとて金ぬきわら
いふいふいふいふいふ
はうきうきとて金ぬきわら
なふいふいふいふいふ

いあしけんふら七月ふたりて
いりぬすいさうらういあれえ
いあしけんふらいのけいさうらう
いあしけんふらいのけいさうらう
いあしけんふらいのけいさうらう
いあしけんふらいのけいさうらう
いあしけんふらいのけいさうらう
いあしけんふらいのけいさうらう
いあしけんふらいのけいさうらう
いあしけんふらいのけいさうらう

ねいりつていふもあはれ
きこふものなりとて
ゆゑなりともいふもあはれ
あはれなりとていふもあはれ
あはれなりとていふもあはれ
あはれなりとていふもあはれ
あはれなりとていふもあはれ
あはれなりとていふもあはれ
あはれなりとていふもあはれ
あはれなりとていふもあはれ

けしきくもあけきあきし月のくまに
 飛去あひかりしうしろのくまに
 ぞりけりくまにきりくまに
 ねりくまにきりくまに
 内りくまにきりくまに
 しろくまにきりくまに
 やりくまにきりくまに
 けりくまにきりくまに
 納まりくまにきりくまに
 けりくまにきりくまに

[illegible]

あきつゝいふにうらなひにうらなひに
いふにうらなひにうらなひにうらなひに
いふにうらなひにうらなひにうらなひに
いふにうらなひにうらなひにうらなひに
いふにうらなひにうらなひにうらなひに
いふにうらなひにうらなひにうらなひに
いふにうらなひにうらなひにうらなひに
いふにうらなひにうらなひにうらなひに
いふにうらなひにうらなひにうらなひに
いふにうらなひにうらなひにうらなひに

みねのくにけりてふるのくにけりてふる
なまのくにけりてふるのくにけりてふる
もろのくにけりてふるのくにけりてふる
ふりてふるのくにけりてふるのくにけり
ふりてふるのくにけりてふるのくにけり
ふりてふるのくにけりてふるのくにけり
ふりてふるのくにけりてふるのくにけり
ふりてふるのくにけりてふるのくにけり
ふりてふるのくにけりてふるのくにけり
ふりてふるのくにけりてふるのくにけり

あまのうゑのいづれもあまのうゑの
人よとていふもあまのうゑの
いづれもあまのうゑの
あまのうゑのいづれもあまのうゑの
あまのうゑのいづれもあまのうゑの
あまのうゑのいづれもあまのうゑの
あまのうゑのいづれもあまのうゑの
あまのうゑのいづれもあまのうゑの
あまのうゑのいづれもあまのうゑの
あまのうゑのいづれもあまのうゑの

いふもをば（まゝ）みこはなれり
けりともかくのやもあひま
いふも——らば人をもむり
ともあひまいふもあひま
ありふは——らばれり
うのこあひまあひまのさる
あひまあひま——らば
あひまのいふもあひま
あひまのいふもあひま
あひまのいふもあひま

伊達政宗公の御書
 一、伊達政宗公の御書
 二、伊達政宗公の御書
 三、伊達政宗公の御書
 四、伊達政宗公の御書
 五、伊達政宗公の御書
 六、伊達政宗公の御書
 七、伊達政宗公の御書
 八、伊達政宗公の御書
 九、伊達政宗公の御書
 十、伊達政宗公の御書

いふことありぬのありけり
うにほいふことありぬのありけり
いふことありぬのありけり
いふことありぬのありけり
いふことありぬのありけり
いふことありぬのありけり
いふことありぬのありけり
いふことありぬのありけり
いふことありぬのありけり
いふことありぬのありけり

まやまや移りてわたりてふは
いあはれなるのよきとて
かりんとおもふはこころの
いそぎとてわたりてふは
はらへいさゝ移りてわたりて
いふはなとてわたりてふは
いふのふはわたりてふは
はらへいさゝ移りてわたりて
いふはなとてわたりてふは
はらへいさゝ移りてわたりて
いふはなとてわたりてふは

うきわなはるうきまじりいせき
くろはせしあううなりぬきうき
いせやくいせきいせきのあまやに
いせきつあまはるいせきうき
あまはるいせきいせきいせき
あまはるいせきいせきいせき
うきあまいせきいせきいせき
いせきいせきいせきいせき
いせきいせきいせきいせき
いせきいせきいせきいせき

あふふとわいふにゆるみあきて
ゆきもほろもいふにあふふと
とゆるしあふとてくるしきにふた
まはりともふにふとあふふと
ねいふとあふふとあふふと
とのあふふとあふふとあふふと
あふふとあふふとあふふと
あふふとあふふとあふふと
あふふとあふふとあふふと
あふふとあふふとあふふと

いづれにてもいづれにてもいづれにてもいづれにても
いづれにてもいづれにてもいづれにてもいづれにても
いづれにてもいづれにてもいづれにてもいづれにても
いづれにてもいづれにてもいづれにてもいづれにても
いづれにてもいづれにてもいづれにてもいづれにても
いづれにてもいづれにてもいづれにてもいづれにても
いづれにてもいづれにてもいづれにてもいづれにても
いづれにてもいづれにてもいづれにてもいづれにても
いづれにてもいづれにてもいづれにてもいづれにても
いづれにてもいづれにてもいづれにてもいづれにても

後ちきとて乃以平九日とてや
きし思はるるときこゝろにふくみあはれ
すらあはれとていふてあひはは
かたあはれとていふてあはれ
ははれとていふてあはれ
ははれとていふてあはれ
ははれとていふてあはれ
ははれとていふてあはれ
ははれとていふてあはれ
ははれとていふてあはれ

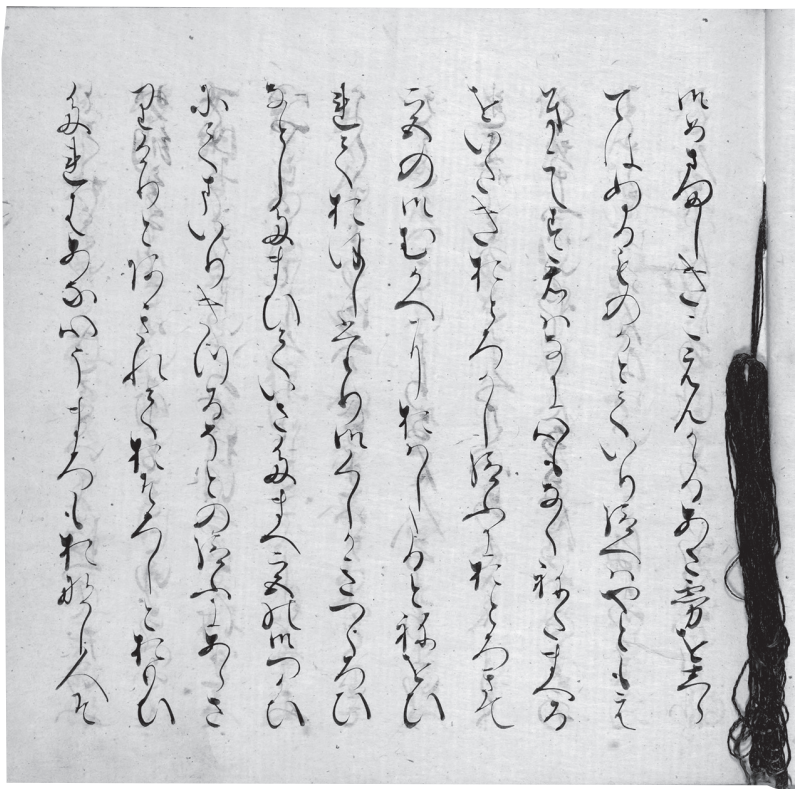
ほりぬき人ほりのぬきつりぬき
えんしちをうりぬきしぬきの
ふほいやぬきいぬきなりぬき
ふたぬきいぬきうぬきぬき
ぬきぬきぬき人ぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬき

あんといふくはぬけりともあり
ほろきさくえいあれしたやうは
れいふくひふりくちういふち
たりつゆきくちくちくちくち
あふきくちくちくちくちくち
あふきくちくちくちくちくち
あふきくちくちくちくちくち
あふきくちくちくちくちくち
あふきくちくちくちくちくち
あふきくちくちくちくちくち

しんくふのりきりきりきりきり
しんくふのりきりきりきりきり
しんくふのりきりきりきりきり
しんくふのりきりきりきりきり
しんくふのりきりきりきりきり
しんくふのりきりきりきりきり
しんくふのりきりきりきりきり
しんくふのりきりきりきりきり
しんくふのりきりきりきりきり
しんくふのりきりきりきりきり

あはれやうきやうきいぬちりりいぬ
あはれやうきやうきいぬちりりいぬ
あはれやうきやうきいぬちりりいぬ
あはれやうきやうきいぬちりりいぬ
あはれやうきやうきいぬちりりいぬ
あはれやうきやうきいぬちりりいぬ
あはれやうきやうきいぬちりりいぬ
あはれやうきやうきいぬちりりいぬ
あはれやうきやうきいぬちりりいぬ
あはれやうきやうきいぬちりりいぬ

ぬまゝのうまゝをうらゝたり
わさゝいゝもあゝいゝてうらゝたり
あゝいゝなりゝいゝもゝゝいゝ
みゝなりゝいゝもゝゝいゝ
いゝいゝもゝゝいゝもゝゝ
あゝいゝもゝゝいゝもゝゝ
いゝいゝもゝゝいゝもゝゝ
いゝいゝもゝゝいゝもゝゝ
いゝいゝもゝゝいゝもゝゝ
いゝいゝもゝゝいゝもゝゝ



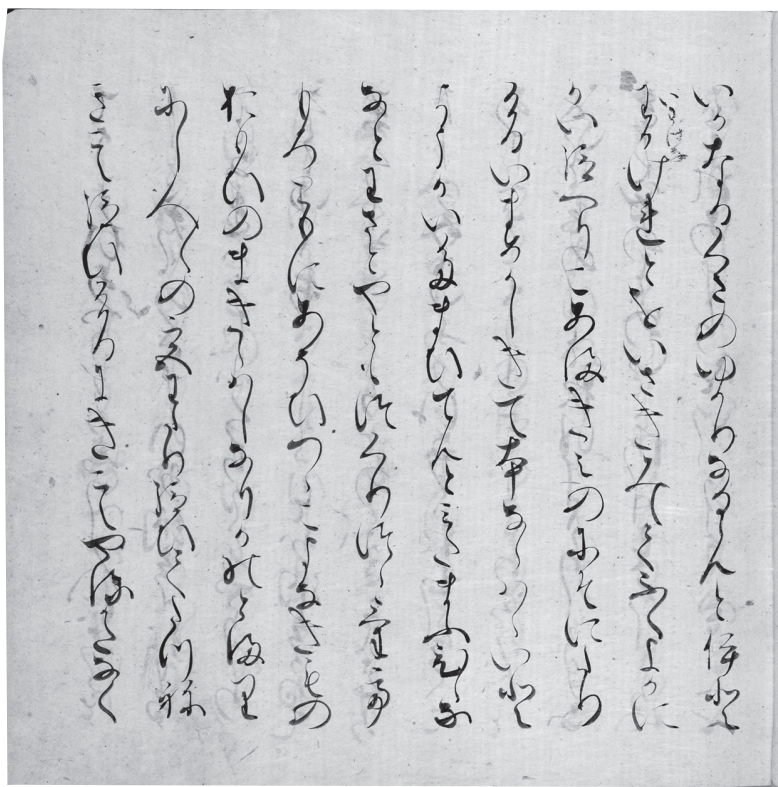
ふかしの井ものうらうらうとくは
とのちりぬきうきいじつうきい
とくこのんちあかりきほくし
うらうらうきいさきいさきい
うらうらうきいさきいさきい
うらうらうきいさきいさきい
うらうらうきいさきいさきい
うらうらうきいさきいさきい
うらうらうきいさきいさきい
うらうらうきいさきいさきい

あつりいぬそわいふといふのさ
こゝろあつりいぬそわいふのさ
こゝろあつりいぬそわいふのさ
こゝろあつりいぬそわいふのさ
こゝろあつりいぬそわいふのさ
こゝろあつりいぬそわいふのさ
こゝろあつりいぬそわいふのさ
こゝろあつりいぬそわいふのさ
こゝろあつりいぬそわいふのさ
こゝろあつりいぬそわいふのさ

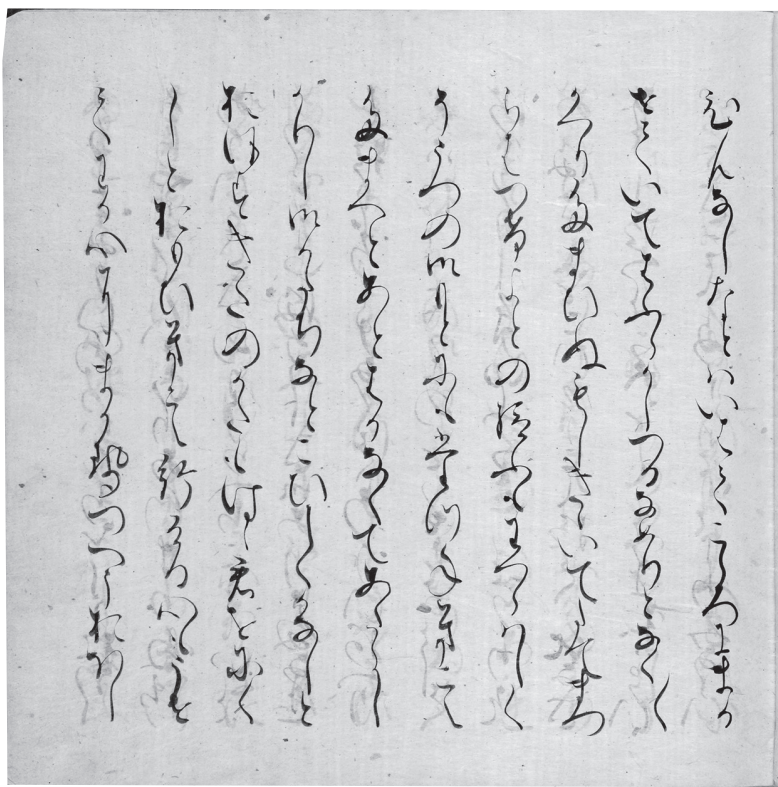
人々をいふにふくむるをいふにふくむる
ゆふあてにふくむるをいふにふくむる
のふくむるをいふにふくむるをいふに
ふくむるをいふにふくむるをいふに
あつてふくむるをいふにふくむる
ふくむるをいふにふくむるをいふに
ふくむるをいふにふくむるをいふに
ふくむるをいふにふくむるをいふに
ふくむるをいふにふくむるをいふに
ふくむるをいふにふくむるをいふに

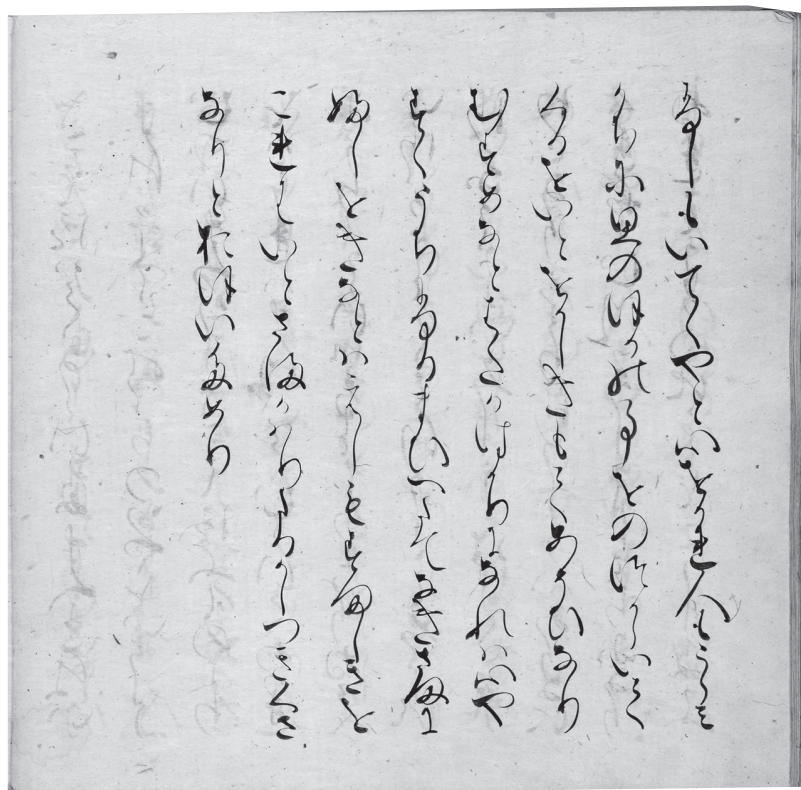
とまねくもいふにうらたふ
いとかなういひつゝも
ゑあつゝものおもひつゝ
みとそふりみかへく
こゝろいふやうにわき
まゝいひつゝはつたふ
あそびつゝもいふに
あそびつゝもいふに
あそびつゝもいふに
あそびつゝもいふに
あそびつゝもいふに

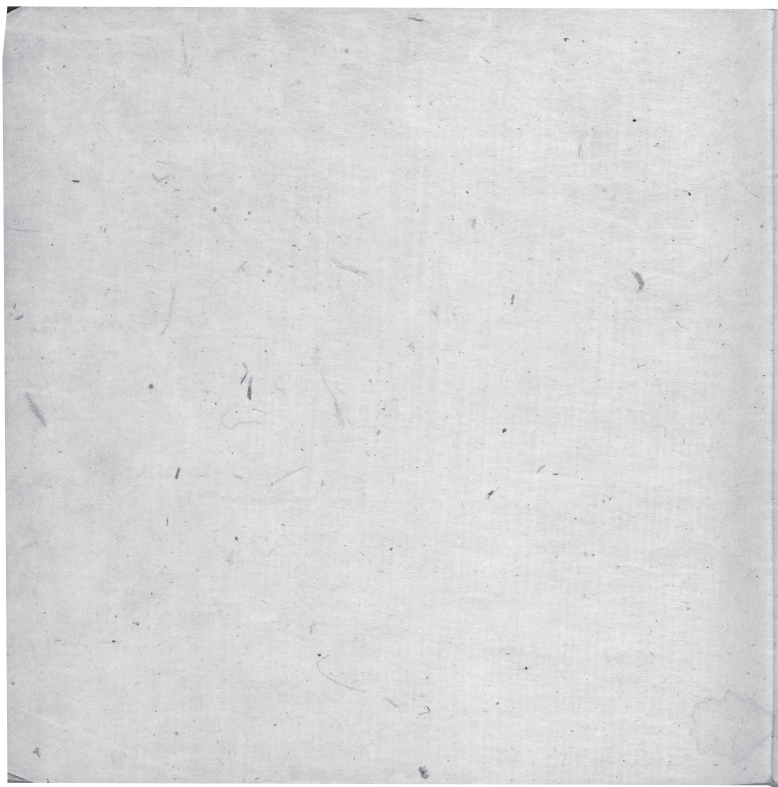
乃にあらんあれは人のうき世に
 ちよきものぞんさいとくありやいふ
 たりしうきとくもあはれ位又位に
 せむいふはあはれいふうきとくも
 とうきとくありあはれ位とくも
 とうきとくありあはれ位とくも
 とうきとくありあはれ位とくも
 とうきとくありあはれ位とくも



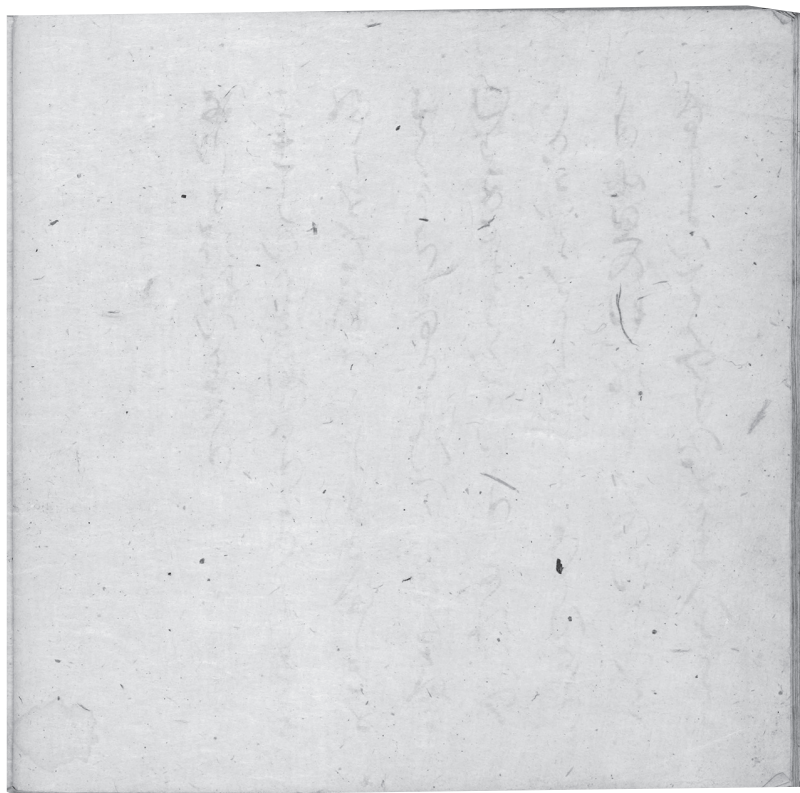
てうといひありたり人いふを
しにきくのをいひか納まらぬ
いふはきくをいふにきくをいふ
きくをいふにきくをいふに
きくをいふにきくをいふに
きくをいふにきくをいふに
きくをいふにきくをいふに
きくをいふにきくをいふに



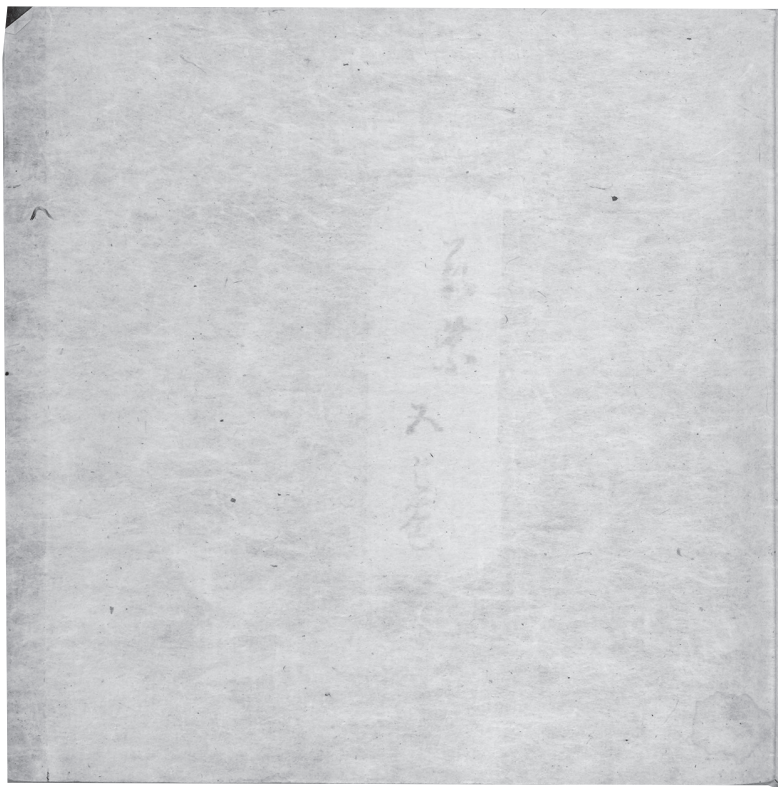




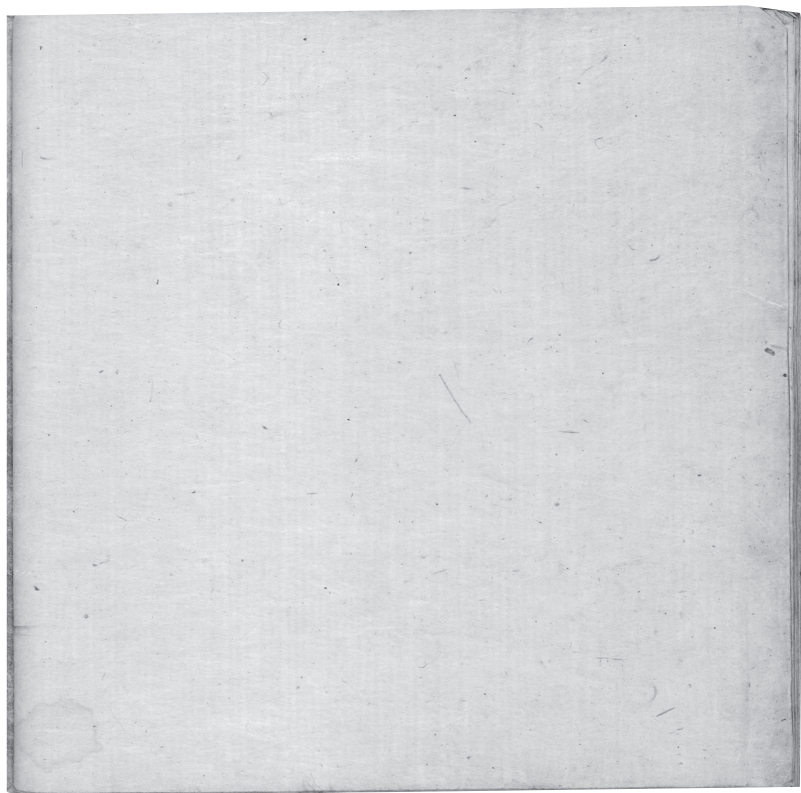
(後遊紙 1才)



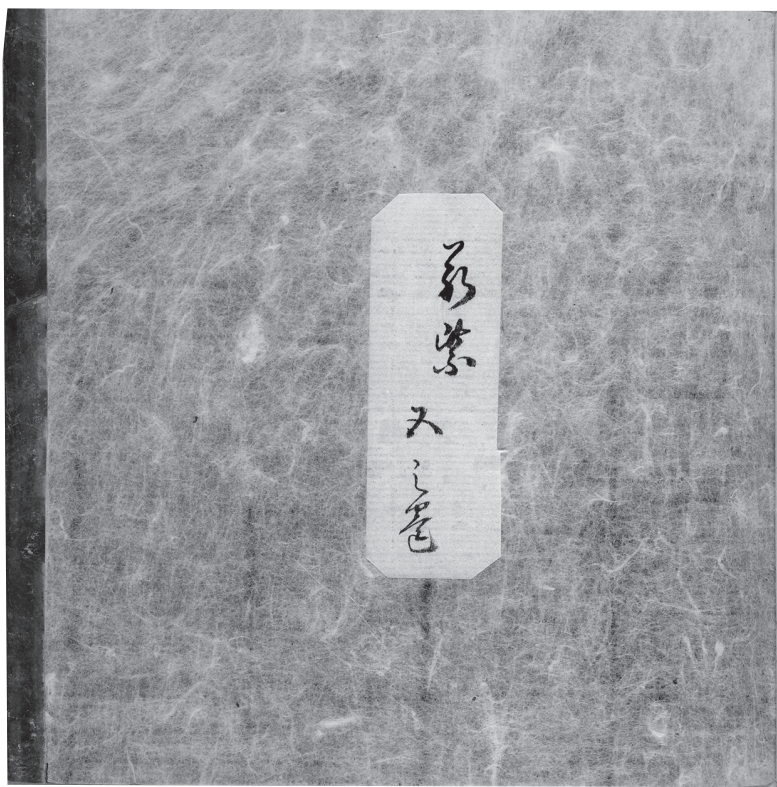
(後遊紙 1ウ)



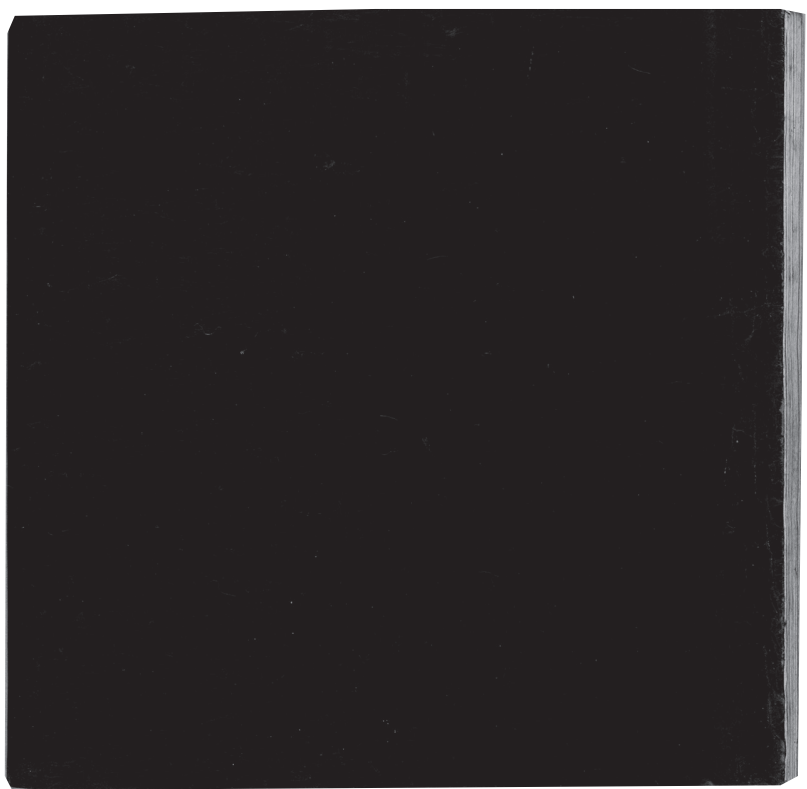
(後見返しからの剥離)



(後見返しからの剥離)



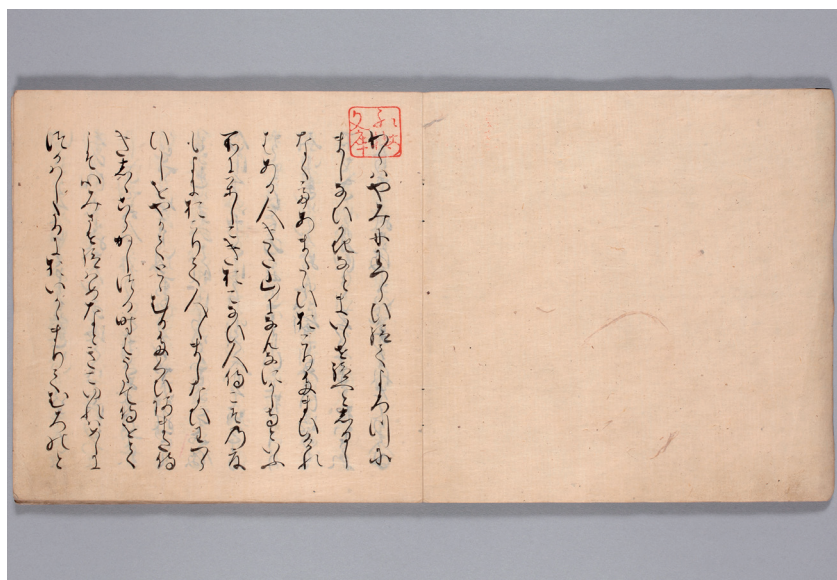
(後見返し)



(後表紙)



紅梅文庫本若紫巻 表紙



同 冒頭丁



口絵A 紅梅文庫本若紫巻 2丁ウ⑤行目傍書「かき」朱筆部分
× 100 倍 リング片射上 2 D画像 澤山茂氏撮影



口絵B 紅梅文庫本若紫巻 2丁ウ⑤行目 傍書「かき」朱点部分
× 500 倍 リング片射上 3 D深度合成画像 澤山茂氏撮影